

〈論 説〉

アジア大環状文化圏 (2)

——ネパールと日本 (3.2) ——

明 石 博 行

はじめに

ネパールと日本に関する論考として、前稿「アジア大環状文化圏 (1)」において、この文化圏に関する導入的な考察をした¹⁾。引き続き、この広大な文化圏がどのような経緯を経て形成されてきたのか、その起源を探ってみることにしよう。

本稿では、「アジア大環状文化圏 (1)」の考察をふまえて、この文化圏の端緒的形成史を論ずるための準備的な考察に取り組むことにする。本稿の基本的な課題は、サピエンス史の展開がどのような過程を経て中央アジアや日本列島にまで及ぶようになったのか、その歴史的過程を探求することに充てられる。その探求なしには、アジア大環状文化圏の起源を語れないからである。アジア大環状文化圏の形成史を論ずるための前提をここで整理してみよう。

ここで検討する内容は、別稿でその一部を論ずる「経済社会学序説」の考察に組み込むほうが本来的には望ましい。けれども、すべての課題を一挙に論じつくすことはできない。そのため、ここでの論述に、やや性格の異なる考察を

¹⁾ 本号所収の「アジア大環状文化圏 (1): ネパールと日本 (3.1)」(以下、「アジア大環状文化圏 (1)」と略記)を参照。本稿は、この前稿の課題を引き継ぎ、アジア大環状文化圏の起点の探求を主眼とする。

組み込むことにする。基本的な結論を整理するだけにとどめなければならないが、そのためだけでも、かなりの回り道が求められるものとなる。

1 土木石骨文化

動物とその土木石骨文化

地球上の植物や動物は、大地や水や大気存在を前提として生きている。いかなる植物や動物も、大地の土と大気圏の空気、降雨や河川そして湖や海の水なしには生きられない。動物たちは、土地や水や空気の条件によって異なる菌類や植物の差違を環境条件として多様化し、それぞれの異なる種を存続させている。植物の生存様式を文化とはいわない。植物相という。しかし、動物の生存と生活の様式にはある種の文化がある。

脳をもつ動物たちは、大地の土や砂や石を利用し、空気や水を獲得しつつ、穴倉や巣を作り、草木や動物たちを食して生きる。アリのような昆虫も、土や木を掘り、木片や石のかけらや砂粒を使って巣を作る。植物の実や花、動物の肉や髄を食用にし、骨や歯のかけらを一種の道具として利用したりもする。鳥類や哺乳類も、生きるために石を利用するし、木片や草、他の動物の骨や牙や貝殻なども利用する。群れをなして生活する鳥類や哺乳類のような動物は、分節化された言語ではないにせよ、初期的な言語体系をもつ。さまざまな動物たちの生活様式には、土や木や石や骨などを利用する社会的な文化がある。

地球上の土や泥や砂や粘土さらに瀝青などを「土」として括り、果実や根菜を含む草木を「木」として括り、大小の石や岩をすべて「石」とし、動物の骨や角そして牙や歯や貝殻などを「骨」として一括するならば、動物たちの生活は土木石骨文化をもつとってよいであろう。動物たちは、土や木や石や骨などを利用して生活する。そのような動物たちの文化の研究には、大きな意義がある。

ここではしかし、動物の文化に立ち入ることは避けなければならない。動物の生活や行動については、基本的に、植物の生育や消滅をめぐる植物相とともに、動物相として語るにとどめよう。ここでは直立歩行を開始した猿人以降の人類

文化に焦点を絞らなければならない。

人類の土木石骨文化

人類は直立二足歩行をすることによって、類人猿を含む他の動物たちから区別される存在となった。二足歩行を開始した人類は、陸上生活をする哺乳類の一種として、その最初期の段階から、空気と水と大地という必須の生活手段の存在を基盤として、植物の果実などを採集し、昆虫や魚貝類から哺乳類にいたるさまざまな動物を捕食の対象とした。それらの点だけをみれば、人類と他の動物たちとのあいだにさしたる差違があったわけではない。

しかし人類は、石器や木器などを手で用いる労働手段とし、土石や植物や動物たちを労働対象として、労働をする、つまり働くことによって、人類史を形成するようになった。直立二足歩行をするようになった人類は、労働手段と労働対象を生産手段として用いることによって、生産活動を行ない、交通関係を発達させ、生命を再生産するための本来的な消費経済活動を拡大してきた。つまり、経済社会を確立し、発展させてきたのである。

猿人の段階から、他の動物たちよりも広い領域で社会的な生産と交通の関係を発展させることによって、人類は一定の音声的な言語体系と思考能力を拡大し、脳髓の大きさと活動力を拡大した。人類は、生産活動の領域を少しずつ広げ、移動しながら互いに交通しあい、本来的な消費を社会的な活動とすることによって経済社会を再生産した。その生産・交通・消費といった経済活動の発展を基礎として、人間としての言語体系と思考様式を発展させてきた。経済社会活動の相互関係のなかで、その思考様式をさらに発展させ、言語活動の領域を広げつつ、土木石骨文化を大きく発展させた。

土木石骨文化と経済社会の発展

19世紀後半からの考古学の発展によって、猿人・原人・旧人・新人という人類区分が確立された。石器の使用にとどまっていた石器時代と青銅を使用するようになった青銅器時代とを区分し、鉄を用いるようになった鉄器時代をさ

らに区分してもきた。文字をもたない先史社会と文字をもつ文明社会とを区分してもきた。これらの区分は、人類史の区分として、21世紀の現在でも意義ある区分となっている。さらに、野蛮・未開・文明という人類史の三段階認識もまた、今日でも意義をもつ段階区分だといえる。

21世紀の人類史認識には、新たな把握の仕方が求められている。しかしそれは、これらの区分を否定し、放棄することではない。いま求められているのは、新たな知見をふまえて、19世紀から20世紀初頭にかけて確立されたこれらの人類史認識を再構築することである。過去の物質的な、あるいは思想的な遺産は、人類史の貴重な資産として意義あるものを継承し、活用しながら発展させなければならない。

直立二足歩行を開始した人類は、経済領域を確立し発展させることによって、その文化を発展させてきた。他の生命体と同様、人類の活動も、すべて人間と自然との物質代謝をとまなう。経済活動の拡大は人類の物質代謝を拡大する過程であり、経済活動を基礎とする人類の社会的活動は、地球上の自然的自然を社会的自然へと変容させてきた。

生産手段と労働力を結合して労働生産物を産出する生産過程、経済的な交通過程、本来的消費過程へと経済活動は内的区分でき、その繰り返しが再生産の循環をなす。生産や交通と区別される消費手段の消費である本来的消費については、以下、消費と書くだけとする。

20世紀の半ば以降、人類は、大気圏外の宇宙での活動にも乗り出した。しかし、人類の生産も交通も消費も、すべて地球上での物質代謝の過程であり、その前提があってはじめて人類の宇宙進出も可能となった。地球上の人類の活動はすべて、廃棄をとまなう一定の様式をもつ生産廃棄様式、交通廃棄様式、消費廃棄様式の統一としての経済様式を基礎としてなされる社会活動である。

生産は個人的な生産過程と集団的な生産過程とに区分でき、消費も個人的消費と集団的消費ないし共同消費とに区分できる。広い意味の交通は、人類とその労働生産物の相互的な関係性をもつ過程であり、生産廃棄過程・交通廃棄過程・消費廃棄過程はそれぞれ経済循環の一部をなす過程である。この経済的循

環過程と結びついた経済活動に支えられることによって、人類は、諸個体の生命と社会を再生産し、さまざまな文化を発展させてきた。

2 前サピエンス史をめぐる認識転換

2010年代の認識転換

すでに広く知られてもいるし、別の機会にも論じたように²⁾、2010年、そして2010年代に、人類史の研究は飛躍的な深化をとげた。その端緒は、2010年に、スヴァンテ・ペーボ率いるドイツのマックスプランク研究所の研究成果によって形づくられた。2022年にノーベル医学・生賞を受賞したその研究によって、出アフリカ後の現生人類は移動してゆく過程で原人たちと交雑し、ネアンデルタール人やデニソワ人たちの遺伝子が現生人類に継承されてきたことが明らかにされた。これらの発見により、わたしたち現生人類の起源をめぐる、「アフリカ単一起源説」と「多地域進化説」をめぐる大論争問題は、ほぼ最終的な決着をみた。サピエンスの起源をめぐる認識の転換がなし遂げられ、広範な合意が形づくられたのである。

その結論は、アフリカ単一起源説でも、多地域進化説でもなかった。アフリカ起源説は主軸にはなっていた。しかし、継承したネアンデルタール人の遺伝子は1~4%ほど、中国人で2%ほどであり、デニソワ人のような別の旧人たちの遺伝子を継承したサピエンスたちもいた。したがって、地域によって異なる旧人たちの遺伝子の一部を継承したという点で、多地域進化説をその一部に含むものであった。

ミレニアム転換期には、さまざまなパラダイム転換が重なり合って生じた。現在もその転換過程は続いている。そのミレニアム転換の第3局面ともいえる21世紀の第1四半期に、人類理解のパラダイム・シフトが生じたといってい

²⁾ 拙稿「経済社会学序説：ミレニアム転換認識の基礎 (1.1)」『駒澤大学経営学部研究紀要』第52巻、2023年、3月、12ページ。

たちの自己認識に大きな転換をもたらした。

この出アフリカ後のホモ・サピエンスたちをめぐる認識の深化と転換は、科学的認識として現生人類の現状理解を深めただけではなかった。それはサピエンス史という俯瞰的な歴史認識を確立するうえで重要な役割を果たした。そのようなサピエンス史を確立するうえで、大きな役割を演じたのは、世界的なベストセラーとなったユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス史』であった。続いて刊行された『ホモ・デウス』も、サピエンス史の現状と将来を考えるうえで、有益な示唆に満ちていた。その近未来予測のなかには、すでに外れてしまったといわざるをえないものも含まれているが、その功績は大きい³⁾。とはいえ、ハラリのサピエンス史の認識とその将来認識は、サピエンス認識の最終形態ではない。サピエンス史の理解は、さらなる深進化(深化と進化)を遂げなければならない。

アジア大環状文化圏の起源とその発展過程の理解は、出アフリカ後のサピエンス史の理解の深進化を前提とする。サピエンス史の要点を再整理してみよう。

土木石骨文化と石器時代認識

猿類と人類とは、持続的に直立二足歩行をするか否かによって区別される。また、天然の石を打ちかいて加工した石器の製造と使用によって、猿人たちの道具と類人猿たちの道具とは区別できる。類人猿たちも道具を作り使用する。けれども、両手を自由に使えるようになった猿人たちは、天然の石を打ちかいて加工し、達成すべき目的に合致するかたちに変形した石器を作れるようになった。原人から旧人へと、人類は脳の大きさと働きをさらに拡大してゆき、現生人類であるサピエンスがその歴史を形成するようになってゆく過程で、人類の石器文化の様相は大きく変化した。石器を作り使用することによって、野

³⁾ Yuval Noah Harari, *Sapiens: A Brief History of Humankind*, 2011. 柴田裕之訳『サピエンス全史』上下、河出書房新社、2016年。柴田裕之訳『サピエンス全史』、河出書房新社、2016年。Y. N. Harari, *Homo Deus: A Brief History of Tomorrow*, 2015. 柴田裕之訳『ホモ・デウス』上下、河出書房新社、2016年。これらについては、前掲拙稿「経済社会学序説(1)」などで、一定の言及をした。

蛮と未開の段階の人類文化は築かれた。しかし、青銅器や鉄器のような金属器の発明と使用なしには、文明は築けなかった。

人類の初期社会を石器時代として捉えることは正しい。だが、原始的な文化を石器文化のみに限定して捉えることは一面的すぎる⁴⁾。人類史は石器のみに依存して築かれてきたのではない。そもそも他の動物たちも、石のみを利用して生活してはいない。動物たちのさまざまな生活様式には、石や岩だけでなく、草木や他の動物の骨や角などを使う、ある種の文化が埋め込まれている。二足歩行を開始した人類は、他の動物にもみられる生活様式を質的に変革し、量的に拡大した。その過程で知能を発展させ、人間らしい生活様式を拡大してきたのである。

猿人から新人に至るまで、人類は大地の上で生活し、洞窟や穴倉を住居として使用した。さまざまな資源を含み産出する土地、したがって土との不可分の関係性において、人類は生産し交通し消費することができた⁵⁾。岩や石も、木や草も、大地が産出する資源の一部であった。チンパンジーなどの類人猿が石や木片を道具として使うことはよく知られている。直立二足歩行を始めた猿人たちも、手を使って石器を作っただけでなく、草木を利用し、木の棍棒などを道具として使用した。動物たちの骨も、打ち砕いて骨髄を栄養源とするにとどまらず、牙や角や貝殻などととも、猿人たちの道具制作の素材となった。猿

⁴⁾ のちにあらためて検討するように、サピエンス史における石器の変化はきわめて重要な意義をもっている。しかし、土木石骨文化の全体的な変化との関連において理解しなければ、石器時代の変化を充分に理解することはできない。

⁵⁾ ここでは示唆しておくだけだが、この土地と人間との、つまり地球という自然と人間との本源的統一から労働主体となる人間を分離したという点に、人類史の大きな特質がある。この土地と人間との本源的統一を分離する過程が資本の本源的蓄積の過程であり、その本源的蓄積の過程を前提として商品に表示される労働の二重性の分離が歴史的に成立する。したがって、前文明社会における小共同体の社会であろうと、一方的贈与つまり貢納を強制する初期文明社会、そして奴隷制や封建制の社会でも、この分離は完成しない。労働力商品の広範な出現がなされないかぎり、使用価値形成労働と価値形成労働は完全には分離しえない。とはいえ、現実の資本制諸社会においては、共同体が消失するわけではない。資本制社会でも、前資本制社会の共同体組織は再編されつつ継承され、寡占的的巨大企業においても共同体的組織が再構築される。

人たちは、土木石骨文化を発展させながら経済活動を拡大し、人類社会を発展させた。

原人の段階で、人類は、火を利用するようになった。火は生産手段としても、また交通手段としても利用でき、消費手段ともなった。原人たちは、基本的に群れ社会であった小共同体の構成員として、大地の一角を占拠ないし占有して原人社会を形成し、火を利用した。乾燥させた草木を制御しながら燃やすことによって、原人たちは草木の使用範囲を拡大し、他の動物たちの攻撃から自分たちの生命を守った。魚介類を含む動物の肉や植物の果実などを焼いて調理することによって、雑菌類を殺して安全性を高め、食生活を豊かにした。火を使って木を固くすれば、狩りや漁労をする道具を改良できた。火の利用は、岩石の使用領域を拡大し、石器を発展させる契機ともなった。動物の肉や草木や果実だけでなく、動物たちの骨や角や貝殻などの利用範囲も拡大した。言語能力の詳細はわからないが、原人たちは、火を囲んで食べ物を分配し、身振り手振りを交えて情報を交換したであろう。火は交通手段でもあった。

こうして猿人や原人たちが発展させた土木石骨文化は、ハイデルベルグ人やネアンデルタール人のような旧人たちによってさらなる発展をみた。旧人たちの火の操作は、意識性と系統性を増した。持続的に火を利用することによって、他の動物からの攻撃におびえる時間は、より少なくなった。夜になっても炉の周りで作業をすることが可能となり、石器や木器や骨角器などの作成技術や種類も大きく発展した。ヨーロッパのハイデルベルグ人たちは、木の先端を削って槍を作り、火であぶって硬くし、それを投げ槍としても使用した。ムステイエ文化の中心的な担い手となったネアンデルタール人たちは、単なる焚火ではなく、土や石を利用した炉を作って意識的・計画的に火を利用し、調理の範囲を拡大して食生活をさらに豊かにした。旧人たちは、木製品や骨角器を改良しながら、アラビア半島やヨーロッパや中央アジアにまでその活動範囲を広げていった。

ネアンデルタール人たちは、打製石器の生産の仕方や利用の仕方を拡充した。個々の打製石器の作り方を改良しただけでなく、石器を棍棒などに括りつけ、

着柄技術を確立して、打撃力を増幅させた。貝殻とか獣の歯や牙などを利用して、首飾りなどの装飾品も作った⁶⁾。石や骨片や角を子どもたちのおもちゃとしても使い、また死者を埋葬するときの供え物としても牙や角などを利用した。玩具の製造と使用もネアンデルタール人に由来するものであろう。草木を利用して、紐や縄を使って連結する技術も開発し、さまざまな道具、装身具、玩具などによる紐縄文化とでもいうべき文化相も形づくっていった。織物も作ったのではないかという推定もなされている。

まだ十分な考古学的資料が整っているとはいえないが、ネアンデルタール人たちは、その意思を伝達するために、一定の記号と紋様を使い始めたようである。彼ら彼女たちは、ヨーロッパから西アジアや中央アジアへとその生活範囲を拡大する過程で、端緒的な紋様文化を形づくり始めていた。ネアンデルタール人は、生産・交通・消費という経済活動を発展させる過程で、言語能力を拡張し、発展させた。死者を埋葬したり悼んだりする文化を形づくったことも確実で、花を愛でる文化も育てた。アニミズム的な宗教観念を形づくり始めたとも、いえそうである。

ネアンデルタール人の学名にはふたつの表記法がある。そのひとつは、ホモ・エレクトス・ネアンデルターレンシスという学名である。日本ではこの表記を目にすることのほうが多いように思える。しかし、ネアンデルタール人たちは高い知性と人間性をもっていた。彼ら彼女たちは、現生人類よりも大きな脳をもち、土木石骨文化を大きく発展させていた。ホモ・エレクトスのなかに止め置くことには違和感がある。ネアンデルタール人たちは、ホモ・エレクトスとしての人類にとどまらず、現生人類にもその直接の遺伝子を残した、ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスというべき存在だったとみるべきであろう⁷⁾。

⁶⁾ ネアンデルタール人に関する情報は、ネット情報も含めて急速に充実してきた。しかし、それらの情報は錯綜しており、どこまで信頼できるのかの判断は難しい。スペインのファン・ルイス・アルスアガの著書の表題にも示されているように、ネアンデルタール人たちがその身を飾る余裕をもち始めていたことはたしかであろう（藤野邦夫訳・岩城正夫監修『ネアンデルタール人の首飾り』、2008年、新評論、参照）。

⁷⁾ ネアンデルタール人の知性や人間性の評価によって、その学名は変わる。その知性

旧人たちの限界

ネアンデルタール人を含む旧人たちは、アジア大環状文化圏を形成するまでにはその生存地域を広げられなかった。ヨーロッパでハイデルベルグ人から分岐をしたと考えられているネアンデルタール人たちは、ヨーロッパから中央アジアにまで、その生活圏を拡大した。けれども、東アジアの多くの地域にまでは、その生存域を広げることができなかった。彼らはアジア大環状文化圏を形成する主体とはなりえなかった。

その実態がよくわかっていないデニソワ人のような旧人は、中央アジアから東アジア、そして南アジアや東南アジアにも、その生活圏を広げていたようである。デニソワ人は、ネアンデルタール人とも交雑したようであり、現生人類にもその遺伝子を遺した。けれども、デニソワ人たちがどのような共同体を形成し、その生活様式がどのようなものであったのかはよくわからない。また、その生活圏がどこまで広がっていたのかもわからない。デニソワ人は、アジア大環状文化圏の人類にその形質の一部を遺した。しかし、アジア大環状文化圏を形成する起点となった人類種とはいえそうもない。

現生人類であるホモ・サピエンス・サピエンス（以下「サピエンス」と略）たちは、出アフリカ後にネアンデルタール人やデニソワ人のような旧人たちと交雑し、旧人たちの遺伝子の一部を継承した。旧人たちが絶滅したのちの唯一の人類種となったサピエンスは、猿人・原人・旧人そして新人といった人類種の進化と発展のなかで、唯一、全地球規模で拡散し、地球表面の各地域において

や人間性を高く評価するひとつの例として、トゥルカナ・ボーイの発見などで知られるリチャード・リーキーの所説をここで引いておく。彼は、多々あるその著書のひとつで、「現生人類を生む進化の作用が五〇万年前から三万四〇〇〇年前にかけて起こった」とし、「いまわれわれが注目している時代の化石で圧倒的に多いのがネアンデルタール人のもの」であり、「人類学者たちは、多様性に富む化石を総称して『古代型ホモ・サピエンス』と呼ぶようになってきている」と書いた（馬場悠男訳『ヒトはいつから人間になったか』、草思社、1996年）。リチャードは、原人をホモ・エレクトス、古代型新人としてネアンデルタール人をホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスとよび、現生人類を現代型新人としてホモ・サピエンス・サピエンスとよんでいた。その後、ネアンデルタール人たちの遺伝子は、現生人類にも継承されていることが判明した。賛否はあろうが、これは妥当な分類だと思われる。

地域文化を形成した人類種となった。グローバル化を実現した最初の人類種となったのである。サピエンスたちは土木石骨文化をさらに大きく発展させた。その過程で金属器を発明して使用するようになり、さらには都市と村落との分離に立脚する文明社会を築くようになっていった。

3 出アフリカ後のサピエンス史

サピエンスとその出アフリカ

30万年前という説もあるけれども、サピエンスの祖先は、ほぼ20万年前にアフリカで誕生したらしい。アフリカの内部で数万年暮らしたのち、サピエンスたちの一部は、12万年ほど前までにアフリカの地を出るようになった。これをサピエンス史における第1次の出アフリカとよぶことができよう。

そのときの基本ルートは、シナイ半島とレバント地方を経由する北方の陸路のみであったと考えられている。これを北東ルートとよんでおこう。この北東ルートには、ナイル河に沿って移動する主軸ルートとともに、サハラ中央部を通過して北アフリカに向かう西側ルートがあったようである。後者については、まだ仮説的性格が残されているのかもしれないが、そのルートも最終的には北東ルートを通過してレバント地方に抜けなければならなかった。つまり、第1次の出アフリカ時に、サピエンスたちはまだ筏や舟を使ってヨーロッパに渡ることはできなかったのである。

サピエンスたちは、ネアンデルタール人たちとさして変わらない石器文化からその歩みを始め、第1次の出アフリカ時までは、ネアンデルタール人たちの経済社会を凌ぐほどの経済力も文化力をもたなかった。アフリカ大陸の内部でも、石器の製造や利用におけるサピエンス文化の発展は、ネアンデルタール人との差異はあまりみられなかった。石器に柄をつける着柄の技術や、動物の皮革加工の技術などでも、サピエンスたちはむしろ、出アフリカ後に遭遇した旧人たちから多くを学んだようである。出アフリカ後のサピエンスたちは、石器の加工と利用の技術のみならず、槍の作成技術や使用技術、動物の皮革や植物

の利用技術といった、狩猟や漁労と結びついた経済的諸手段の製作と活用の仕方、真似たり、学んだりした。年長者や負傷者たちの扶養、死者の埋葬と供養、装身具の作成と使用といった文化的な習慣や風習なども、ネアンデルタール人のほうが先んじていたようにみえる。

10万年より前のサピエンスたちは、地上を歩いて移動してゆく段階にとどまっていた。その後も基本的にはそうであったろう。出アフリカ後のサピエンスたちは、移動してゆく過程で接触した旧人たちの文化的要素を真似たり、学んだりしながら経済社会を形づくっていった。ときには発展させ、ときには絶滅の道を歩んだりもした。おそらく7万年ほど前までは、ネアンデルタール人のような旧人たちの文化とサピエンスたちの文化とのあいだにさしたる相違は生まれなかった。ネアンデルタール人たちの文化と同様、サピエンスたちの文化も、ムスティエ型の石器段階の文化にとどまっていたといえよう。

第1次の出アフリカは成功せず、アフリカを離れたサピエンスたちは死滅するか、アフリカへとおし戻された。けれども、サピエンスたちは、第2次の出アフリカを前後する時期から、旧人たちを超える大きな発明をなし遂げるようになった。決定的なもののひとつは、筏ないし舟の発明と使用である。筏も舟の一種であるともいえるが、形態の差異があるので、一応の区別をしておく。

ネアンデルタール人たちが舟とか筏を作ったということは確認できない。砂漠の砂か海底に埋もれた残骸でも出てこないかぎり、考古学的な史料によってそれを確定することはきわめて困難であろう。しかし、サピエンスたちが第2次の出アフリカ時に舟ないし筏を作り始めたのではないかという可能性は、かなり高いものとなってきた。

第2次の出アフリカのルートは、ひとつではなく、ふたつあったようである⁸⁾。

⁸⁾ さしあたり、篠田謙一『DNAで語る日本人起源論』、岩波現代全書、2015年、参照。同書は、北東ルートを北方ルート、南方東端部ルートを南方ルートとよび、「遺伝的なデータが示す六万年前という出アフリカの時期が正しいとすると、ホモ・サピエンスはこのバブ・エル・マンデブ海峡を横断するルートを利用して東に向けて進んだと考えれば、化石の証拠との整合性がとれる」とし、アフリカの北東部とアラビア半島の旧石器には技術的な類似性が認められていることも「両者の文化的な接触

第1のルートは、第1次の出アフリカ時と同じ、シナイ半島とレバント地方を經由する北方の陸路である。この北東ルートは陸路を歩いて移動できた。第2のルートは、バブ・エル・マンデブ海峡を通過してアラビア半島に至る南方の東端部ルートである。このルートを南方東端部ルートとよんでおこう。

この南方東端部ルートは、新たな発明と革新を必要としたであろう点で、第1のルートよりも重要であり、その後の歴史に与えたであろう影響はより大きかった。というのは、このルートでの出アフリカには、渡海を必要としたからである。氷期で海面が下がっていたときでも、アフリカ大陸とアラビア半島は10キロメートル以上の海面で隔てられてみられている。泳いで渡れる距離とは考えられないので、このルートでの出アフリカには、舟か筏の存在を想定しなければならない。

現在のアラビア半島はきわめて厳しい乾燥地帯として有名である。しかし過去には、ゾウなどが生息できた古環境があった。出アフリカを果たした原人や旧人たちは、アラビア半島にもその生活域を広げ、ヨーロッパ方面やアジア方面にも広がっていた。アラビア半島では、100万年以上前のオルドワン文化やアシュール文化の石器、また旧人たちのムスティエ文化の石器も見つかっている⁹⁾。

サピエンスたちの第2次の出アフリカ時にこの南方東端部ルートが実在したという推定には、まだ仮説的性格が残されているともいえる。しかし、サピエンスたちの石器の研究が進み、またアフリカの東端部とアラビア半島南部に囲まれたアデン湾の古気候の研究が進んだ結果、このルートがありえた可能性は高くなってきた¹⁰⁾。海面がもっとも低くなったときでも、10キロメートル以

を示唆している」としている (59ページ)。

⁹⁾ 東京国立博物館・サウジアラビア国家遺産観光庁・NHK・朝日新聞社編『アラビアの道：サウジアラビア王国の至宝』、2018年、参照。

¹⁰⁾ 川端穂高『気候変動と「日本人」20万年史』、岩波書店、2022年、参照。同書は、堆積物中の高等植物由来の有機化合物(n-アルカン)の含有量を調べた結果、n-アルカン値の高い値が約21万～18万年前、約12万～9万5000年前、約7万から5万年前に認められとし、この期間にかなりの降水の恵みがあったことを示した。川端は、「驚いたことに、この湿潤3期間は、ホモ・サピエンスにとって最重要の三つのイベ

上の海面でアフリカ大陸とアラビア半島が隔てられていたと考えられており、舟なり筏なりを發明して利用しなければ、このルートでの出アフリカは不可能だったと考えられる。したがって、まだ完全な立証ができたわけではないが、第2次の出アフリカ時に舟か筏を利用した可能性はある。

出アフリカ後のサピエンスたちは、5万年ほど前までに、東南アジアの陸塊（スンダ大陸）から、ウォーレス線を越えて海を渡り、ニューギニアと一体となってサフル大陸とよばれていたオーストラリアに到達した。したがって、このころまでには、舟なり筏なりは確実に製作され、使用されるようになっていた。遅くとも5万年前ころまでに、サピエンスたちの生産交通様式は大きく発展していたことになる¹¹⁾。

筏や舟を造るためには、草木や竹を伐採し、加工する道具を製作し改良しなければならない。藁などの一時的利用にとどまらず、縄や紐のような縛る補助具を發明したり改良したりして、活用しなければならない。葦舟のような草を束ねた舟であっても、草を刈り、部分ごとに束ねた草束を重ね合わせて組み上げなければならないし、筏を作る場合でも、丸太や竹を伐採し、強固に接合しなければならない。筏そして舟の持続的な使用には、かなり高度な技術発展が前提となる。

舟の改良と発展の初期的な歴史のなかで特筆すべきは、出アフリカ後のサピエンスによる丸木舟の發明と使用である。日本では、1948年に、当時日本最

ント——ヒトの誕生（約20万年前）、一部のヒトのイスラエルへの遠征（約13～12万年前）、そして出アフリカ（6万年前前後）に対応していた」と記している。

¹¹⁾ 石村智「オーストラリア・オセアニアの旧石器文化」、稲田孝司・佐藤宏之『講座日本の考古学2 旧石器時代（下）』、青木書店、2010年、所収、参照。原人たちが渡海した可能性はあるが、オーストラリアへの到達が本格的な海洋進出として重要な意義をもつことは、その後の研究でも確認されている（海部陽介・佐藤宏之「人類の海洋進出」、『季刊考古学』161、2022年、所収、参照）。「オセアニアにおける人類の拡散において、海への適応がいかに重要であったかということ、強調してもしすぎることはない」という石村の指摘は妥当なものであった。ただし、「人類が船を用いてサフル大陸に渡ってきたことはまちがいない」という指摘は、船ではなく舟としたほうがよかったであろう。

古とされた縄紋時代の丸木舟 (BC3000年ころ) が発掘された。その後も日本の各地で縄紋時代の丸木舟が発掘され、20世紀のうちに、縄文時代人は丸木舟を駆使して広い範囲で交易活動を繰り広げていたことが広く知られるようになった¹²⁾。日本最古の丸木舟は、千葉県市川市出土の雷下遺跡の約7500年前(較正年代)であり、これより古い出土例はないとされている¹³⁾。世界各地で丸木舟は発掘されているが、丸木舟の建造と使用がいつ、どこで始まったのかは、正確にはわからない。世界最古の丸木舟でも、1万年前ころのものまでしか、その存在は確認できていないようである。

けれども、2010年代の後半期になって、人類がオーストラリア大陸に到達するまでの過程で丸木舟が発明され、使用されるようになっていたのではないかという仮説が、究明すべき課題として急浮上するようになった。また、アジア大陸の南方や、スンダランドという拡大版オーストラリア大陸からさらに北上してゆく過程で、サピエンスたちは丸木舟を使って移動し、さらに東方の太平洋へと進出していったのではないかということも、かなりの確度で推定できるようになってきた。

¹²⁾ 須藤利一編『船』、法政大学出版局、1968年、また、『海を渡った縄文人：縄文時代の交流と交易』、小学館、1999年、参照。なお、千田稔編著『海の古代史：東アジア地中海考』、角川選書、2006年、で、180例ほどの縄紋時代を含む古代の丸木舟の出土事例が一覧表のかたちでまとめられている。研究成果は今後も積み重ねられてゆくであろうが、日本での土器使用が始まる1万年6000年ころより前の丸木舟の発見がなされるかどうかはまだわからない。

¹³⁾ 池谷信之「遺跡様態からみた縄文海洋進出史(伊豆諸島)」、前掲『季刊考古学』161、所収、参照。なお、同論文は、刃部磨製石斧と丸木舟の存在とを結びつける見解に対し、丸木舟と神津島産の黒曜石が出土した上ノ山遺跡などがある「静岡県東部では、磨製石斧の出土例が皆無である」という疑問を提起している。しかし、静岡県東部は木材の伐採地ではなく、材木ないし丸木舟を他地域から交易によって入手したという可能性もある。また、他地域の丸木舟が寄港するかたちで、黒曜石の加工地であった上ノ山遺跡などに黒曜石を運び入れていた可能性もある。したがって、刃部磨製石斧が静岡県東部で出土していないということは、丸木舟と刃部磨製石斧との関連性を否定する論拠とはならないであろう。

4万年7000年前の刃部磨製石器の発見とスギメの渡海

これらの点については若干の言及をすでにしたが¹⁴⁾、2010年代後半になされた画期的な発見と実験について、いまし補足を加えておこう。まず、発見についてだが、2016年と17年に、それまで日本にしかないと考えられていた3万5000年より前の刃部磨製石斧がオーストラリアで発見された。年代の推定値には相違もあるが、最古の刃部磨製石斧の年代は、4万7000年前ころ（一説では6万5000年前）まで遡れることが判明し、妥当な学説としてすでに受け入れられている¹⁵⁾。東南アジアや中国などでの発見例では、まだそれほど古くまでは遡れない。しかし今後、4年以上前の刃部磨製石斧が発見される可能性は残されていよう。

また、2016年に「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」が正式に発足し、2016年から18年にかけて草を束ねて作った草束舟や竹を使った竹筏による渡航実験が実施され、2019年には丸木舟を用いた航海実験がなされた¹⁶⁾。そのさい、刃部磨製石斧を使ってスギの大木を切り倒す実験がなされ、そのスギで作られ「スギメ」と名づけられた丸木舟による台湾から与那国島への実験航海のみが成功した。この画期的な実験航海によって、台湾から琉球列島への渡海は、草束舟や竹筏では不可能であることが判明し、丸木舟以外の方法はほぼありえないということが明らかになった。

スギメの航海実験にともない、古環境の再検討なども進められた。現在の推定では、氷期で海面が80メートル以上も深かった時代でも、黒潮の潮力は現在とさほどの違いはないと考えられている。流されるかたちで偶然に琉球列島に流れ着くという可能性もほぼない、と判断されるようにもなった。これら

¹⁴⁾ 前掲拙稿「経済社会学序説(1.1)」、参照。

¹⁵⁾ 海部陽介『サピエンス日本上陸:3万年前の大航海』、講談社、2020年、174-175ページ。岩瀬彬・佐野勝宏・長崎潤一・山田昌久・海部陽介「後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧からさぐる舟の可能性」、前掲『季刊考古学』、所収。

¹⁶⁾ この点はNHKの特集番組を含むスギメの航海をめぐる報道で広く知られるようになった。海部陽介『サピエンス日本上陸:3万年前の大航海』、講談社、2020年、参照。海部陽介『日本人はどこから来たのか?』、文春文庫、2019年、参照。

の推定が正しければ、4万7000年前には刃部磨製石斧がすでに存在していたこと、また台湾から琉球列島を介して九州に到達するには丸木舟の存在が不可欠であったということを併せて考えると、刃部磨製石斧と丸木舟の製造には密接な結びつきがあるのではないかという推定ができる。この実験考古学の成果には、たしかに大きな意義があった。

刃部磨製石器と丸木舟の製造の関連については、考察がいま深められつつある。3万5000年より前の刃部磨製石器が東南アジアや中国の沿岸部で発見されたり、4万年前から3万年前の丸木舟の残骸が発見されたりするならば、事態はより明確になろう。しかし残念ながら、現状では、刃部磨製石斧と丸木舟の製作には密接な結びつきがありそうだという以上の推定は、できそうもない。

日本列島における初期の技術発展

とはいえ、日本の刃部磨製石斧と丸木舟をめぐる認識には、独自の重要な問題がある。神津島産の黒曜石の採集と拡散をめぐる問題がそれである。加えて日本では、横斧¹⁷⁾ともよばれる3万5000年以前の刃部磨製石斧とともに、縦斧ともよばれることのある手斧(チョウナ)あるいは鑿(ノミ)のようなものとして使われた可能性もある、台形様石器も多く出土している。いまひとつ、日本には、ほぼ3万5000年前にまで遡れる狩猟技術である落とし穴がある。それらを総合的に再考察してみることが必要であろう。

黒潮を乗り切ることには大きな困難がある日本の海域では、丸木舟といっても、表面をていねいに削って速度を上げることができる舟が求められたであろう。とくに、神津島産の黒曜石を採集し、本州と神津島との往復路に使われる丸木舟には、高度の技術が注ぎ込まれたはずである。また、北海道秋田10遺跡や

¹⁷⁾ 斧を大きく縦斧と横斧に区分することがある。佐原眞は、農具の鋏のように「刃先と柄がほぼ直行する手斧」を「横斧」とよび、金太郎のまさかりのように「刃先と柄がほぼ平行する狭義の斧」を「縦斧」とよんで区別した(佐原『日本の歴史1 日本人の誕生』、72ページ)。この区別は有益で、本稿でもしばしば用いることにする。

種子島立切遺跡からは、刃部磨製石斧と台形様石器がともに発見されている。大型の刃部磨製石器は、木(大木)を切り倒すときに横斧として用いられた可能性が高い。台形様石器は、しばしば狩猟用具とみなされてきたけれども、縦斧の手斧のように用いられたものもあつたであろうし、小さいものは鑿として使われた可能性もあろう。

大型の丸木舟を作るためには、大木を切り倒さなければならない。筏を作るときでも、ある程度の太さをもつ木を切り倒さなければならない。3万年以上前の刃部磨製石器は、堅穴住居や一種のテントのような住居を作るとき木材の伐採にも使われたであろう。だが、筏や丸木舟を作るときの大木の伐採に使われた可能性も大いにある。舟を作るときには手斧や鑿が使われるが、金属器のない時代には、丸木舟の仕上げに台形様石器が用いられたということも、充分にありえよう。

3万年より前に作られた丸木舟そのものが発掘されないかぎり、完全な立証はできない。けれども、日本の各地で3万年以上前の刃部磨製石器が発見されており、台形様石器を随伴する遺跡があるということは、日本列島に移住してきた最初期のサピエンスたちが、すでに丸木舟を製作できたということを強く示唆していよう。そのような技術なしには、神津島との往還はほぼできなかったであろうし、日本の各地にみられる広範囲の黒曜石交易の痕跡を説明することも困難であろう。論争は続くだろうが、日本列島では、3万年以上前から丸木舟や筏を使った海上交通を介して広い範囲で交易がなされていたということは、かなり確実視してよいのではなからうか。

落し穴を使った猟についても、若干の解説を付しておく。ここで注意しておくべきは、落し穴を使った狩猟は、分別狩猟とでもいうべき、乱獲を抑制する狩猟法であった。狩猟といってもいくつかの段階がある。無差別狩猟がなされ、大型動物などを絶滅させてしまった地域は、世界各地にある。けれども、日本列島のように、特定の定住地域で持続的な狩猟を続けようとするならば、無差別狩猟はすぐに行きづまる。

ほぼ3万年前ないし2万9000年前と推定されている始良火山の大噴火前の日

本の落し穴については、「古本州島南岸地域に張り付くように分布していた常緑樹・落葉広葉樹林帯とよく一致している」ことが指摘されている¹⁸⁾。日本列島の初期の落し穴による狩猟については、常緑樹と落葉広葉樹が混在する特定の樹林地帯でなされていたことをふまえる必要がある。この地域的限定性をふまえるならば、3万年以上前の落し穴による狩猟は、すでに無差別殺戮をするような狩猟法ではなくなっていたと考えなければなるまい。

雌雄の見境なくメスや未成熟の個体を殺してしまえば、動物たちはすぐに絶滅してしまう。日本列島の限られた地域で狩猟を持続させようとするならば、メスや未成熟の個体の殺戮を避け、動物たちを選別して個体数を維持し、管理しなければならない。弓矢の使用やそれに先行するヤリによる狩猟の段階でも、メスや未成熟の子は殺さないというかたちでの管理はなされたであろう。落し穴による管理狩猟はいま一步進んだ方法である。穴に落ちたメスや未成熟の個体は再度野に放つというかたちで、無差別殺戮を避け、動物資源の量的な管理をしたはずである。

それは動物の飼育化に進む過渡期の狩猟法とみることができる。落し穴による管理狩猟でも、未成熟の個体を野に放つとき、あまりに幼ければすぐに死んでしまう。イノシシの子のウリボウなどは可愛いから、それらを少し育てて自力で生きられるようになったとき、適切な場所に放つというような部分飼育もなされたであろう¹⁹⁾。管理の仕方は地域や時代によって異なっていたであろうが、日本列島に移住してきた人々やその子孫たちは、縄紋時代が始まるはるか以前から、落し穴による動物相の管理を始めていたと考えられる。

日本列島のこうした事例にみられるように、動物相の管理は、狩猟・漁労の段階で少しずつ始まっていたといえる。その変化や発展の在り方は地域ごとに

¹⁸⁾ 引用は、佐藤宏之『旧石器時代：日本文化のはじまり』、敬文社、2019年、90ページ。

¹⁹⁾ 縄紋時代には、ウリボウを育て、死んでしまったウリボウを埋葬していた事例がある。ウリボウを八丈島のような離島に連れて行って放つといったことが縄紋時代になされていたことも、すでに確認されている。そのような部分飼育がいつ始まったかを確認するのは困難だが、落し穴猟の起源の古さを考えれば、土器が導入される前からそれは始まっていたであろう。

異なっていた。大陸方面ではイノシシをブタ化する方向で家畜化を進めた地域もあった。日本列島のなかでは、イノシシをブタに変えるところまでには至らなかったとしても、管理狩猟の進展は確実にあったはずである。

植物についても、似たようなことがいえる。日本列島における植物栽培の歴史は、弥生時代になって突然始まったというようなものではなかった。さまざまな地域から移住してきた日本列島人たちは、その経験の積み重ねるなかで、堅果類やマメ類、イモのような根菜類の管理が少しずつ進んでいった。そのような経験の蓄積のうえに、やがてイネの栽培を導入し、穀物栽培法を進化させていったのである。

縄紋時代にクリの栽培がなされていたことは、青森県の三内丸山遺跡の発掘と研究によって広く知られるようになった。あとでいま一度振り返ることにするが、大豆(ダイズ)や小豆(アズキ)、そして荳胡麻(エゴマ)などが縄紋時代に広い範囲で栽培されるようになっていたことも、すでによく知られている²⁰⁾。瓢箪(ヒョウタン)などは、先土器時代から栽培されていた可能性も高いようである。

出アフリカ後のサピエンスたちは、移住していった先々で大型獣を中心とする大規模な殺戮を行なった。けれども、殺戮や破壊ばかりを繰り返していたのではない。日本列島のサピエンスたちにもみられるように、動物相や植物相の一定の意識的な自然管理をすることによって、未開的共生による生活様式を意識的に生みだしつつあった。日本列島では、そのような基礎のうえに土器が導入されることによって縄紋時代が築かれたのであり、先土器時代と縄紋時代とのあいだには連続性があった。

やがて意識的な栽培へと進む植物や飼育する動物の種類は、地域を異にすればさまざまでありえた。しかし、サピエンスたちは、一定の定住生活を始めるようになると、土器が導入される前の石器時代でも、植物や動物の管理と育成を進めるようになっていった。土器を使用するようになる前に定住化を進めて

²⁰⁾ 小畑浩己『タネをまく縄文人：最新科学が覆す農耕の起源』、吉川弘文館、2016年、参照。

いったサピエンスたちが、植物の栽培化と動物たちの意識的管理や飼育化を少しずつ押し進めていったことは、多くの地域で確認できるようになってきた。

そのような先土器文化の到達点をふまえるならば、従来の石器時代認識は改めなければならなくなっているのではないかと思われる。旧石器時代(前期旧石器時代・中期旧石器時代・新石器時代)と新石器時代という時代区分、およびこの区分と不可分のかたちで形成され定着してきた旧石器時代・縄文(縄紋)時代・弥生時代・古墳時代という日本独特の時代区分について、さらなる再考を試みることにしよう。

4 石器時代論再考

ジョン・ラボックによる二大区分

2010年代後半期からの考古学研究の進展をふまえて、まず、旧石器時代と新石器時代という二大区分から再考してみよう。そのためには、簡単にはあ

るけれども、考古学の古典を振り返っておく必要がある。考古学に関する本を少し読めばすぐに学べように、現生人類に「ホモ・サピエンス」という学名を与えたのは、分類学の基礎を築いたカール・フォン・リンネ(1707-1778)であった。現在でもよく用いられる石器時代・青銅器時代・鉄器時代という三区分法をあらためて提唱したのは、クリスチャン・トムセン(1788-1865)である。トムセンによって再確立された石器時代認識は、ジョン・ラボック(1834-1913)によってさらに二区分され、人類史の四大区分論が確立された。

ラボックは、1865年に刊行した著書『先史時代』²¹⁾において、石器時代を旧石器期(Archæolithic period)と新石器期(Neolithic period)とに、二大区分した。ラボックは、期(period)と時代(age)との用語的な区別にはこだわってはおら

²¹⁾ John Lubock, *Pre-historic times, as illustrated by ancient remains, and the manners and customs of modern savages*. London, Williams and Norgate, 1865. 本書は、ネット上でいくつも公開されており、容易に全文を読むことができる。

ず、新石器時代 (The Neolithic age) という表現も使っていた。つまり彼は、先史時代を旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代に四区分したのである。しかし、ラボックの旧石器時代と新石器時代という二分法については、あらためて考えてみなければならぬことがある。というのは、従来のラボック説の理解には、かなりの単純化がなされていたと考えざるをえないからである。加えて、彼の四大区分についても、補足的な解説を付加して必要がある。

旧石器時代と新石器時代という二分法については、ふたつの主要な問題に限定するかたちで、検討を加えることにする。そのひとつは、20世紀の考古学者や歴史家たちが、旧石器と打製石器、また新石器と磨製石器とを対応させるかたちで、つまり、《旧石器≡打製石器》と《新石器≡磨製石器》というかたちで、ラボック説を単純化して解説したということである。もうひとつは、旧石器時代は狩猟採集経済の社会であり、新石器時代は農耕牧畜経済の社会であるという、すなわち《旧石器時代≡狩猟採集生活》と《新石器≡農耕牧畜生活》という単純化した対応関係で理解し、解説してきたということである。《》で括った部分は要点を示すための簡略化をした表記だが、これらを重ね合わせるならば、《旧石器時代≡打製石器≡狩猟採集生活》と《新石器時代≡磨製石器≡農耕牧畜生活》という単純化説が形成されることになる²²⁾。

はたして、ラボック説はこのようなかたちで単純化して理解してよいものなのだろうか。前者の問題から検討してみよう。ラボックが新石器時代を磨製石器の時代と捉えたという理解は、間違いだとはいえない。たしかに彼は、『先史時代』の第1章で、新石器時代を「後期の、すなわち磨製石器の時代 (The later or polished Stone age)」と規定していたからである。しかし、この第1章部

²²⁾ 文章がやや乱れているが、このような単純化をした例として、広い範囲で読まれた河出書房新社刊の『世界の歴史1』の記述を引用しておく。「ラボックによる時代区分からみると、旧石器時代は打製石器と狩猟採取生活とで特徴づけられ、新石器時代は磨製石器と農耕牧畜生活の特徴をもつものとしている」(今西・池田・河合・伊谷『世界の歴史1 人類の誕生 [文庫版]』、河出書房新社、1989年、39ページ)。石器時代に関する関連図書を読むならば、いたるところで、旧石器時代は打製石器と狩猟採取生活の時代であり、新石器時代は磨製石器と農耕牧畜生活の時代である、といった類の記述に遭遇する。

分の記述だけを切り離してラボック説だとすることは、彼の説を十分に理解したことにはならない。そのようなラボック説の理解だけにとどまるならば、それは彼の所説を過度に単純化することになるからである。

ラボックは、『先史時代』の第3章で、旧石器期との対比において、「新石器時代すなわち後期石器時代」についての紹介と解説をした。そのとき彼は、新石器時代について、「石の道具 (the stone implements) は、さらに巧みに (more skillfully)、さらに形態を変え (more varied in form)、そしてしばしば磨かれている (and often polished)」、という指摘をしていた。この記述からわかるように、ラボックは、新石器時代の道具が旧石器時代よりも「さらに巧みに」作られ、「形態を変えて」いるということを重視した。磨製石器はその巧みや形態の変化を代表する例のひとつであった。ラボックは、磨製石器のみを新石器だとしたのではない。磨製のものを含む、巧みに、そしてさまざまに形態を変えるかたちで作られた石器を新石器だと捉えたのである。

打製石器を使っていた時代が旧石器時代だというような記述の内容は、『先史時代』の第3章にはみられない。第3章で紹介されている石器を検討すればわかるように、そこには磨製石器ではない数多くの打製石器が図示されるかたちで紹介されている。そのなかには、刃部磨製石器ではないかと思われるものも含まれている (第82図、第83図、第84図参照)。さまざまな用途に対応する形態をもつ石器が整理されて提示されており、必ずしも明確ではないが台形様石器のようなものもそこには含まれている (第3章の扉図の8参照)。ラボックは磨製石器のみを新石器時代の石器とみなしていたわけではなかったのである。

もうひとつのラボック解釈、すなわち、彼が旧石器時代を打製石器と狩猟採集生活に結びつけ、また新石器時代を磨製石器と農耕牧畜生活と結びつけた、という解釈はどうだろうか。彼の所説を検討してみるならば、これもまた過剰解釈だということがわかる。ラボックは、第1章で、先史考古学の期を画す時代 (epoch) の最初の時代を「旧石器期」と特徴づけたが、そのとき彼がもっとも重視していたのは、それが定住前の「流浪・移住 (Drift)」の時代だったということであった。彼はまた、旧石器時代を説明するとき、「マンモス、洞穴グ

マ、毛サイ (Woolly-haired rhinoceros)、その他の絶滅した動物たち (other-extinct animals) とヨーロッパの地を分け合っていたとき」と、その時代を特徴づけていた。

(のちにネアンデルタール人やクロマニヨン人などと区別されるようになった) ヨーロッパの各地を移動しながらマンモスなどとともに生活していた時代の人類は、たしかに狩猟採集の生活をしてきた。しかし、狩猟採集生活をしてきた時代が旧石器時代であるとラボックが規定した記述を、わたしは発見できなかった。マンモスなどが絶滅したのちにも、ヨーロッパの住人たちは打製石器を使い、狩猟採集生活を続けていた。ラボックは打製石器を使っていた時代と狩猟採集生活の時代とを同一視していたのではなかった。打製石器は新石器時代にも使われていたからである。

農耕や牧畜をするようになった時代が「新石器時代すなわち後期石器時代」と関連をもっていたということは、ラボックも否定しなかったであろう。けれども、新石器時代と農耕牧畜社会とが対応するという明確な記述は、ラボックの著書には存在しないように思われる。農耕や牧畜を開始していなかった時代でも、定住するようになってからの石器は洗練され、その種類も多様になった。ラボックにとって、定住化とマンモスなどの大型狩猟動物の絶滅という契機は、新石器時代への移行においてより重要な意義をもっていた。彼は農耕や牧畜の開始と新石器時代とを直接に対応させてはいなかった。

ラボックの所説については、さらにもうひとつ、指摘しておくべきことがある。旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代という四大区分をしたとき、彼はその区分をヨーロッパの時代区分として提起したのだ、ということがそれである。ラボックは第1章部分で、はっきりと、この四区分は「アジアとアフリカの近隣地域 (the neighbouring parts of Asia and Africa) にも拡張できるかもしれない」が、「さしあたり、わたしはこの分類をヨーロッパのみに適用するだけ」だと記していた。彼はこの四大区分を適用できない地域があるとこと、また研究が進んでいないため判断できない地域があることを明確に認識していた。その認識を前提として、この四大区分を提起したのであった。

ラボックは、新石器時代と農耕牧畜生活とを直接に対応させるようなことは、していなかった。旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代という四大区分を、どの社会にでも適用されるような、普遍的な段階区分として提起したのでもなかったのである。

ゴードン・チャイルドの影響

ゴードン・チャイルドの所説の一部は、「ネパールと日本 (2.2)」で紹介した。ここであらためて、チャイルドの所説を再検討しなければならない。というのは、《旧石器≡打製石器≡狩猟採集生活》と《新石器≡磨製石器≡農耕牧畜生活》という、単純化されたラボック説の解説には、チャイルドの所説の影響が反映されているからである。

G・チャイルドは、1925年に、『ヨーロッパ文明の曙』という有名な書物を刊行した。そのなかで彼は、「人類文明の歴史は、少なくともヨーロッパでは、慣習的に、ふたつの主要な局面 (two main phases) に分けられてきた」とした。そのひとつは「旧石器 (palaeolithic) すなわち古い石器時代 (old stone age)」であり、いまひとつは「新石器および金属器使用の時代 (neolithic and metal using ages)」である。彼はまた、1936年に、『文明の起源』という表題で訳された入門的著作である *Man makes himself* の初版を刊行した。これらの著作は、いずれも第2次大戦後に改訂されている。以下、これらふたつの著書を中心に、チャイルドの所説を整理しておこう²³⁾。

チャイルドによれば、旧石器時代の人間は、「その生活をまったくの狩猟、漁業、そして野生の果実・根茎・地虫・貝などの採集に頼った」。永きにわたる旧石器期に、人 (man) は、「単なる食物採集者」として、「狩猟と漁労の産物

²³⁾ V. Gordon Childe, *The Dawn of European Civilization*, Routledge, Trench, Trubner, 1925., Reprinted in 1996 by Routledge, Transferred to Digital Printing 2008. さきの引用と要約は、第1章の冒頭部分からのものである。以下、*Man makes himself*, Fourth edition, 2003. からの引用については、C. A. Watts & Co. Ltd. のリプリント版と、ねずまさし訳『文明の起元』上、を用いるが、訳文は変更した。煩瑣となるので、引用ページの記載は省略する。

に依存」して生活し、「野生の堅果や果実」で補足するという、「救いようのない未開状態(a state of helpless barbarism)」にとどまっていた。旧石器時代の人間は、その最末期に犬を育てだしたけれども「飼育動物²⁴⁾」をもたず、「農業に従事せず」、「土器を知らず」、「石もしくはフリントを磨かなかった」。一方、新石器期に、人は、「飼育動物と栽培植物を所有」することでみずからの「食物供給を支配」し、「木を切り倒して木工品を作り」、「協業を組織」し、また「商取引を開始すること」によって、「環境の束縛」を振り払った。

「旧石器期の研究」は、「人間性の歴史」そのものに属する。対するに、「人間活動の特殊な個々の表現としてのヨーロッパ文明に固有の研究」は、「新石器時代に形を整え始める」。これらの記述でわかるように、旧石器時代は食物採集の時代であり、新石器時代は農耕と牧畜の時代であるという二分法は、ラボックの説ではなかった。それは、チャイルドの説なのである。

けれどもチャイルドは、ヨーロッパ史を旧石器時代・旧石器時代・青銅器時代・鉄器時代という四段階に区分するというラボックの説を、そのままのかたちでは継承しなかった。彼は、(1) 旧石器時代、(2) 新石器時代および金属器時代、というかたちで、ヨーロッパの先史時代を二大区分した。チャイルドによれば、旧石器時代は狩猟・漁労に依存して生活する食物採集者の未開社会であり、新石器時代は動物飼育と耕作農業によって食物を獲得し、木工品を製造し、協業を組織し、商取引を開始した時代である。けれども、新石器時代は、青銅器や鉄器という金属器を使用する社会と連結し一体をなす時代として、旧石器時代と並ぶヨーロッパ史の二大区分の一部となる時代だったのである。

両者の差違は歴然としている。チャイルドの二大区分は、ラボックによる石器時代の二大区分と大きく異なる性格をもっていた。しかし、チャイルドが「慣習的に、ふたつの主要な局面に分けられてきた」としたこともあって、日本では(必ずしも日本だけではないが)、ラボックによる石器時代の二大区分にチャ

²⁴⁾ 以下、domestic animal(s)は「飼育動物」と訳す。ふつうは「家畜」と訳すし、それによいものだけでも、イヌやネコを家畜とよぶことに抵抗感があることをふまえて、このように訳す。同様に、cultivated plant(s)も、「栽培植物」という訳語で統一する。

イルドによる文明形成史の二大区分が投影されるかたちの解釈が生まれてきた。ラボックの所説とチャイルドの所説は、それぞれが明確に区別されるかたちで整理されないまま、両者が混同されるような事態が生じたのであった。

《旧石器⇨打製石器⇨狩猟採集生活》と《新石器⇨磨製石器⇨農耕牧畜生活》という、しばしばラボック説と考えられてきたものは、むしろチャイルドの二大区分に近い。しかし、新石器時代と金属器時代を一括するチャイルド説と同じではない。結果的に、ラボック説でもチャイルド説でもない混同説が、ラボック説だとされてきたのだといえる。そのような混同の帰結として、同時にチャイルド説の誤解でもある誤解されたラボック説が、専門的な研究者のあいだで形成されて継承され、一般に流布されてきたのだといえよう。

戦前期日本における石器時代認識

圏域ないし地域や論者が異なれば、石器時代の区分の仕方にもかなりの差異がみられる。ヨーロッパでも、米国でも中国でも、日本でもそうである。念のため、日本の石器時代認識と石器時代後の認識の変遷について、いま少し詳しくみておこう。

ヨーロッパの一部には、旧石器時代・中石器時代・新石器時代という三分法もみられるが、日本では旧石器時代と新石器時代という二段階区分が採用されてきた。石器時代の二大区分は、中石器時代という時代認識は欧米の研究者のなかでも支配的なものとはみなせないという、ヨーロッパ基準の理解とも、それは結びついていよう。チャイルドも代表的な中石器時代否定論者であったから、そのような解釈が日本で定着したことは、なんら不思議なことではない。日本でも、中石器時代認識を継承する論者はいたし、現在でもいるかもしれない。しかし、それは少数派といえよう。

日本の研究者のなかには、ヨーロッパで形づくられた石器時代認識を普遍的なものとして受容する論者もいた。しかし第2次大戦後、欧米の学説については、それを部分的に修正するかたちで利用する論者が多くなった。皇国史観のような非科学的な歴史観の強制という戦前戦中期の経験を経て、石器時代認識

も、大戦前と大戦後とで大きく変化したといえる。

江戸時代からの考古学研究の伝統は、日本の考古学者たちに重みをもって継承されてきた²⁵⁾。しかし、考古学は明治期に、欧米から輸入された学問としての性格をもつようになった²⁶⁾。20世紀の初頭以降、日本では、旧石器時代と新石器時代との二区分法が考古学者の通説となった。この石器時代の認識をめぐる変遷を簡単に整理しておこう。戦前の学説もかなり多様だが、ひとつの代表として、ここでは濱田耕作(1881-1938)の所説を確認するとどめておく。濱田は、「旧石器と新石器の二時代に分かつことは、イギリスのラボック氏に創まれる」として、ラボックの二大区分を継承した。濱田は、「旧石器時代とは人類が現時すでに絶滅もしくは棲息地を変ぜる哺乳類と共棲せる時代の石器時代をいう」とし、「旧石器の特性は、新石器時代とはその距離大にして、またその時代もすこぶる長し。旧石器の特性は、新石器におけるが如き磨研せられたものなきことにして、石鏃のごときもいまだこれを有せず」と特徴づけた。

一方、「新石器とは、世界が動物界その他において、現今の状態と大差なき時代に繰られたる石器をいう」とし、「新石器の特徴は打製(chipped)のほかに、磨製(polished)のものを生ずることなり」と特徴づけ、「日本における石器時代

²⁵⁾ たとえば、江戸時代の研究成果をふまえることなしには、金石や古墳の研究はできない。森浩一編『考古学の先覚者たち』中央公論社、1985年、参照。

²⁶⁾ 大村宏『日本先史考古学史講義：考古学者たちの人と学問』、六一書房、2014年、は、以下の七学派に分けている。①「エドワード・S・モース(1838～1925)による大森貝塚の発掘に触発され、考古学に関心をもった弟子たちの一派」である「モールズ学派」(「モース学派」か?)、②坪井正五郎(1863～1913)が創設した「帝国大学理科大学人類学教室を拠点とする先史時代の文物を取り扱う流れ」、③「旧帝室博物館を拠点とした弥生式の時代の金属器やそれ以降の新しい文物を取り扱う流れ」である「博物館派」(八木槎三郎『明治考古学史』1935年)、④「江戸時代の木内石亭を代表とする種々雑多な職業をもった『好古』趣味人たちの流れ」である「集古会派」(八木・同)、⑤「海外の考古学を視野に入れた本格的な研究者群」と「文系大学研究者や国立研究機関の研究者の一群」である「第五の潮流」、⑥「初中等学校教員の研究者を中核とする在野考古学研究者の一群」である「第六の潮流」、⑦「マルクス主義考古学・古代史学の立場に立つ研究者の一群」である「第七の潮流」。日本の先史考古学が、きわめて多様な研究者群と潮流を含むものであることをこの分類によって教えられる。「先史」という研究領域の基礎的理解を問題とするものとして、これらの潮流のすべてが考察しなければならない問題、それがここでの考察の対象となっている。

はこの新石器時代に属する」とした。

濱田は、新石器には、磨製石器のみではなく打製のものもあることを、自明の前提としていたようにみえる。その解説は簡にして要を得たものであった。また濱田は、「旧石器の最も古拙なるものより」さらに「原始的なる石器」をまず人類が制作したという、「原石器 (eolith)」論についても言及した。「一々の遺物につきて、積極的にその人工に成れるや否やを確かむること難し」としつつも、「理論上よりしてこれが存在を不穩当」だとしたのであった。この原石器論をふまえるならば、濱田は石器時代を原石器時代・旧石器時代・新石器時代に三区分した、と解することもできる。

濱田の独自性は、旧石器時代の存在について、「支那、日本においてはいまだその確証するものを発見せず」とした点にあった。中国については当時においても適切な判断ではなかったが、濱田のような石器時代の基本的二区分を基礎として、岩宿遺跡の発見に至るまで、日本には旧石器時代はなかったという認識が定着した。

戦後日本の石器時代認識

大戦後の1949年、相沢忠洋(1926-1989)によって、岩宿稲荷山の赤土層のなかから黒曜石の石器が発見された²⁷⁾。同年、明治大学の杉原壮介(1913-1983)・芹沢長介(1919-2006)によって調査が継続され、関東ローム層内の土器をともなわない石器群の存在が確認された。この岩宿遺跡の発見によって日本にも旧石器時代があったという認識が確立し、旧石器時代と新石器時代という二大区分は、一定の留保を付すかたちで継承されるようになった。その後日本では新石器時代という把握への疑問がもたれるようになり、旧石器時代・縄文(縄紋)

²⁷⁾ この発見については、現在でもたえず振り返られている。相沢忠洋は、『岩宿の発見：幻の旧石器を求めて』、講談社、1969年、などで、自身の生い立ちから発見に至る経緯やその後の成果を詳しく記している。考古学のような研究領域では、狭い意味での専門家のみが画期的な業績をあげるのではないということを、相沢の業績は示している。相沢の発見の画期的な意義は、後期旧石器時代とよばれてきた時代の名称を変えることによって失われるものではない。

時代・弥生時代・古墳時代という歴史の発展段階区分が多く論者によって受容されるようになった。

このような日本の発展段階区分の原型は、岩波書店の第1期の日本史講座の第1巻『日本歴史 原始および古代1』によって、端的に形成されたといえる²⁸⁾。本書は、1960年代の日本古代史研究の代表類型として、その後の研究に大きな影響を及ぼした。

『日本歴史 原始および古代1』は、石母田正(1912-1986)の論文「古代史概説」を巻頭に載せた。この石母田の論文には独自の功績があり、別稿においてあらためて言及する。この巻頭論文に続き、芹沢長介「旧石器時代の諸問題」、坪井清足「縄文文化論」、近藤義郎「弥生文化論」という論稿が位置づけるという構成をとった。また、直木孝次郎「国家の発生」、小林行雄「古墳文化の形成」という論稿を付加し、最後に、藤間生大「四・五世紀の東アジアと日本」という論稿で締め括られていた。この構成は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という区分によって、東アジアの一国ないし一地域として日本列島の古代史を理解し研究するという基本形式の原型を確立したものだといえる。

その後、新石器時代認識と日本列島史認識とを整合的に理解するための枠組みをめぐって、日本の多くの考古学者や歴史家たちは苦勞した。1980年代には、普遍的な世界史的概念として、ヨーロッパ起源の旧石器時代と新石器時代の区分を継承しようとする立場も、かなり有力なものとなっていた²⁹⁾。しかし、そのような論者も、新石器時代については、「世界史的区分の概念として用いられるようになった」が、農耕・牧畜の開始や土器、磨製石器の使用といった諸特徴は、世界的にみてけっして齊一的に展開したものではなく、「時代概念としての限界もまた指摘されるようになった」ことを認めていた。この立場は、「『新石器時代』なる概念は、人類文化のある特定の時期と性格を示すものとし

²⁸⁾ 石母田・芹沢・坪井・近藤・直木・小林・藤間『岩波講座 日本歴史 原始および古代1』、岩波書店、1962年。

²⁹⁾ 鈴木公雄「日本の新石器時代」、歴史学研究会・日本史研究会編集『日本歴史1』、東京大学出版会、1984年、所収、参照。以下の引用は同論文による。

て、いまだに一定の有効性を有する部分もあることは確か」だとして、「新石器文化としての縄文文化」を捉えようとしたのであった。

1980年代には、このような見解もかなりの影響力をもっていた。しかし、それに批判的な見解も提起されるようになっていた。たとえば佐原眞(1932-2002)のような、日本固有の時代区分で整理すればよいとする立場も有力なものとなっていた。佐原は、「旧石器という表現は、当然、新石器時代に対する表現である」とし、アメリカが石器・古拙期・形成期という区分を使っているように、「日本も、岩宿・縄紋・弥生……」と固有の名称をつけておき、『これは中国・ヨーロッパのこの時代に対応する』と説明する方が、はるかに明快」だとした。その立場から、八幡一郎(1902-1987)や角田文衛(1913-2008)の提案をふまえて、ほぼ後期旧石器時代に対応するであろう時代を「岩宿時代」とよぶことを提唱した。

佐原によれば、旧石器時代と新石器時代は「更新世に属する打製石器のみの時代と、完新世に属する精巧な打製石器と磨製石器が存在する時代を呼び分けたもの」で、その後「農作物の栽培と食用家畜の飼育、土器の使用も新石器時代の文化の特徴として加えられた」。だが、研究が進むと「更新世から完新世へ、食料採集から食料生産への変化、磨製石器・土器の出現など、重要な転換や出現は決してみなそろって実現したのではないことが」分かり、「食料生産段階にはいった石器時代を新石器時代とよぶことが提案された」。この新たな定義による新石器時代は「西アジア・ヨーロッパ・中国には、あてはまるものがある」けれども、「日本のように、岩宿時代に磨製石器を持ち、鉄器時代(弥生時代)に食料生産段階にはいったところでは、新旧どちらの定義もあてはまらない。「日本には新石器時代は存在しなかったと考えるべき」で、「縄紋時代を新石器時代とよぶのは混乱をまねくばかりである」。佐原は、このように主張し、その立場から縄紋時代を新石器時代と称することにも異を唱えた³⁰⁾。

「岩宿時代に磨製石器を持ち」という記述にみられるように、おそらく佐原

³⁰⁾ 佐原眞『体系日本の歴史1日本人の誕生』、小学館、1987年。引用は同書の32-33ページ、および75-76ページによる。

は、刃部磨製石器を新石器と考えていたのであろう。しかし佐原は、旧石器時代に対応する「岩宿時代」を、Ⅰ期(3万年前まで)・Ⅱ期(3万~1万3000年前)・Ⅲ期(1万3000~1万2000年前)に分けて理解するという基本認識をもち、日本には新石器時代は基本的になかったという基本認識を保持していた。しかし、土器をもつ縄紋時代はもはや旧石器時代ではないとみなしてもいたので、岩宿時代のつぎに縄紋時代がくるという段階区分をしたのであろう³¹⁾。しかし、そのように解釈してよいのかどうかも、佐原の記述からは確定できない。

佐原の段階区分の特質は、旧石器時代と新石器時代という二大区分をただ消し去り、その区分を論じないということに尽きる。佐原の時代区分は、石器時代内部の二大区分と新石器時代認識を事実上消し去ってしまうことになるが、それを明示的に述べてはいない。「岩宿時代」とよばれているものがいかなる時代的特質をもつものなのかも明確にされていないし、いかなる区分基準にもとづいて岩宿時代の開始と終焉を定めるのかも不明確である。岩宿時代が後期旧石器時代に対応するならば、日本の新石器時代はどうなるのかという問題は、あい変わらず残ってしまうのである。

その後の研究史をみると、「岩宿時代」という呼称への賛同者は少なく、定着しなかった。しかし、新石器時代と縄文時代とを対応させるような見解も、そのまま継承されたとはいえなかった。けっきょく、埴原和郎(1927-2004)の整

³¹⁾ これはひとつの解釈にすぎず、そうであったと断言することはできない。ただ、現在でも、局部磨製石器を新石器だと考え、同時に日本には新石器時代はなかったと考えているように思われる研究者は、影響力のある研究者のなかに一定数いる。たとえば青柳正規は、「日本列島やオーストラリアでは旧石器時代の段階であるのもかわらず部分的に磨きを加えた石斧が発見されており、一九世紀に定義された新石器時代という時代概念は西アジア、ヨーロッパでは有効だが、それ以外の地域では十分な有効性をもっているわけではない」という言い方をしている(青柳正規『人類文明の黎明と暮れ方』、講談社学術文庫、103ページ)。青柳は、一方で局部磨製石器を新石器だと捉えているが、他方で局部磨製石器が存在する時代も後期旧石器時代だと捉えるので、ヨーロッパと西アジア以外の新石器時代概念の妥当性を否定せざるをえなくなったのだ、と読みとれる。だが、金属器を基本的に使っていないが磨製石器を多く使うようになった縄紋時代は、新石器時代ではないのであろうか。石器時代を旧石器時代と新石器時代に内部区分するという区分そのものを否定して捨て去るならば、やはり不合理な時代認識とならざるをえないであろう。

理³²⁾にみられるような、両者のいわば折衷といえる、旧石器時代・縄紋(縄文)時代・弥生時代・古墳時代という時代整理の仕方が、しだいに通説とみなされるようになった。それは日本の考古学者そして古代史研究者の通説となっているとあってよからう³³⁾。

折衷説の混乱

けれども、日本におけるこのような折衷の時代区分は、その基本論理が混乱しているといわざるをえない。というのは、区分規準の一貫性がそこには欠けているからである。現代日本の通説ともいえる折衷説は、石器時代と金属器時代という、道具を製作するときの基礎をなす素材による時代区分を崩してしまった。その結果、日本の折衷説は、混乱のうえに混乱を重ねるといって、まことに非論理的な学説となっている。各時代にそくして、いまし確認をしておこう。

すぐにわかるように、旧石器時代と前縄紋時代とを対応させることはできない。また、縄紋時代と新石器時代とを重ね合わせることもできない。なぜなら、石器時代と金属器時代を区分するときの規準は、石なのか金属なのかという素材の区別にあるが、前縄紋時代と縄紋時代とを区分する基準は、土器を製造し使用しているかどうかだからである。

土器を製造し使用するようになった時代から縄紋時代が始まるということは、すでに定着した時代区分の把握である。土器使用の時代的画期性をふまえるならば、そのような時代区分は理に叶っている。縄紋時代は、すでに土器を製作し使用するようになった時代であり、同時に多くの磨製石器を使ってもいた。したがって、縄文時代を旧石器時代と規定することはできない。しかし、

³²⁾ 埴原和郎「日本人の形成」、『岩波講座日本通史第1巻 日本列島と人類社会』、岩波書店、1993年、所収、参照。

³³⁾ 東京国立博物館をはじめ、各地の有力な博物館の展示の仕方では、この区分形式が基本となっている。また、松本武彦『列島創世記：旧石器・縄文・弥生・古墳時代』、小学館、2007年、や、玉田芳編『史跡で読む日本の歴史1:列島文化のはじまり』、吉川弘文館、2009年、以下の「史跡で読む…」シリーズの構成にもみられるように、この区分法を踏襲する文献は数多くみられる。

縄文時代には金属器は偶発的にしか入っておらず、その時代の道具は基本的に石器であった。したがって、縄文時代は新石器時代のひとつの段階だといわざるをえない。にもかかわらず、新石器時代という時代認識は、後期旧石器時代・縄文(縄紋)時代という時代区分では存在しない。また、刃部磨製石器のような局部磨製石器が広い範囲で使われ、磨製石器が一般的に使われるようになっていても、農耕や牧畜が始まっていなければ、旧石器時代とされてしまう。時代認識の混乱ないし無概念化のものでもない。

弥生時代についても考えてみよう。稲作とくに水田による稲作が開始されるときから、弥生時代は始まる³⁴⁾。これもすでに定着した時代区分の把握である。弥生時代にはすでに金属器が入ってきていたのだから、弥生時代は金石併用時代といえるが、新石器時代とはもはやいえない。したがって、旧石器時代のつぎに縄文時代が続くとする段階区分では、旧石器時代から新石器時代を経て金石併用時代へと移行していった日本列島史において、弥生時代までを視野に入れても、新石器時代が列島の人類史から消えてしまう。その結果、旧石器時代・縄文(縄紋)時代・弥生時代……と続く時代区分では、新石器時代という時代認識を消し去ってしまうがゆえに、最初の旧石器時代がなぜ「旧」といえるのかも不明確になってしまう。非論理的な時代認識であるといわざるをえない。

なお、補足的にだが、古墳時代という墳墓の形式による時代区分についても付言しておく。階級社会へと移行してゆき、支配階級が権力を握る文明社会となれば、墳墓の形式や形態も変わる。したがって、古墳によって時代区分をするということも、ひとつの指標としては理に叶っている。古墳時代は基本的に金属器時代へと移行しており、石器時代とはもはやいえない。石器はその後も使い続けられるし、岩や石は依然として重要な素材であり続ける。観賞用あるいは文化財の素材としては、現在でも石や岩はきわめて重要な素材である。

³⁴⁾ 弥生時代に関する初期の認識は、東京で発見された弥生式の土器によるものであった。中山平次郎(1871-1956)によって、石器時代(先史)と古墳時代(原史)の「中間時代」の存在が指摘され、弥生式土器が使われるようになった時代はすでに金石併用時代となっていることが認識されるようになり、弥生時代認識の基礎が確立された。弥生時代の開始いかんは、米の生産の開始いかんで区別することが、その後定着した。

けれども、古墳時代になると、石器は急速に労働手段や交通手段の主要な形態ではなくなってゆく。農具や狩猟具や漁労具はしだいに金属製のものにとって代わられてゆき、武器も金属製となってゆく。馬車や牛車などの車は石では作れないし、馬の鐙や蹄鉄なども石ではできない(不可能とはいえないが、きわめて効率の悪いものしかできない)。古墳時代以降は、基本的に、石の製品は経済社会の基本構造を決定する基礎素材ではなくなってゆき、金属が生産手段や交通手段の基本素材となってゆくのである。

つまり、日本の古墳時代は、視点を変えれば、青銅器中心の金石併用時代から鉄器時代へと、時代が急速に転換してゆく時代であった。しかし、弥生時代から古墳時代へという区分認識は、直接的なかたちではその転換を示していない。ここでもまた、時代区分の規準が変更され、その結果、金属器時代への転換とその内部区分は、墳墓という別の象徴的な時代区分への補足でしかなくなっている。木に竹を接ぐではないが、石に土器を接ぎ、土器に稲を接ぎ、稲に墓を接ぐ、という、区分の基準をコロコロ変えてなんの矛盾も感じないという非論理性が、現代日本の通説的な時代区分論の基礎となっている。

新石器時代という把握はなぜ消失したのか

そこであらためて、中石器時代という石器時代認識が日本で定着せず、また新石器時代という石器時代認識も放棄されるようになったのはなぜだったのか、その理由を考えてみることにしよう。まず、中石器時代という認識が定着しなかった理由だが、その理由のひとつは、戦前期からの旧石器時代と新石器時代という二大区分の伝統が作用していたといえよう。

考古学者にかぎらず、研究者というものは、先行の学説をまず理解し、理に叶っているものを継承しようとする。それはしばしば、研究者のなかに伝統維持に安住するという保守的志向を生む。日本の考古学者たちの知的風土のなかにも、伝統に安住する保守性があった。根本に立ち返って再考するということをせず、戦前から教えられ続けてきた旧石器時代と新石器時代という二大区分に安住し、中石器時代という時代区分の意義を深く考えることもなかったとい

えよう。

この知的伝統にはまた、旧石器時代に関するある種のロマン主義も作用していたといえよう。ヨーロッパのみならず、西アジアから東アジアに至る他のアジア地域とは異なり、日本では旧石器時代の確実な遺跡や遺物が長いあいだ発見されなかった。旧石器時代の遺跡や遺物が発見されることを待ち望んでいたのは、市井の好事家だけでなかった。多くの考古学者たちも、日本列島の歴史にも旧石器時代があってほしいと願っていた。岩宿の発見がなし遂げられたとき、考古学者や歴史家たちの多くが賛辞を送り、市井の多くの人々も関心をよせた。それはいまも画期的な発見として教えられ続けている。ある種のロマン主義がそこに作用していたことは否定できまい。

中石器時代などではなく、旧石器時代の遺跡が日本にもあってほしいという思いは、21世紀になっても持続していよう。部分磨製石器が出現した時代を新石器時代だと認めるならば、日本には旧石器時代はなかったことになってしまう。2000年に旧石器遺跡の捏造事件が発覚してから、従来型の前期旧石器時代や中期旧石器時代が日本列島にあったのかどうかは、さらに疑わしいものとなった。日本にも明確な旧石器時代があってほしい。そうした思いが、日本の後期旧石器時代という時代認識を維持させてきた一因ともなってきたのではなかったか。

新石器時代認識が日本であいまいにされてきた背景には、さらに、新石器時代を農耕や牧畜の開始と直接的なかたちで結びつける、ある種の知的混乱が作用していたといえる³⁵⁾。加えて、日本では、G・チャイルドの学説の影響もあっ

³⁵⁾ ヨーロッパ史や西アジア史に限定するならば、新石器時代を農耕や牧畜の開始と直接的なかたちで結びつけることは、必ずしも不当なことではない。ヨーロッパへのサピエンスたちの移住は陸路でよかった。また、農耕や牧畜の発展とともに、磨製石器を含む石器の洗練化が進んだことは事実であるし、さらに青銅器文明への変化が急速にうながされてゆきもした。オーストラリアや日本列島とは異なり、筏や丸木舟の重要性もそれほど大きなものではなかった。ヨーロッパ史においては、舟ではなく船、それも帆をもった大型船が歴史において大きな重みをもっていた。帆船の製作においては、もはや石器ではなく、金属製の大型の斧や手斧が重要視される。海に囲まれたオーストラリアや日本列島のサピエンスたちとは異なり、歩いて移動

て、中石器時代という時代認識が定着しなかった。前稿で言及をしたように、チャイルドは、生産力の上昇と結びついて生ずる人口の急速な拡大に焦点を絞り、旧石器後の革命を、(1) 新石器革命、(2) 新石器革命から都市革命への過渡期、(3) 都市革命、(4) 古代知識革命、というかたちで整理し、文明の発生を説明した。

そのさいチャイルドは、「中石器時代は、経済的には旧石器時代の生活様式の単なる延長にすぎなかった」として、中石器時代を旧石器時代の延長として把握した。そのような見地から、人口の急拡大をもたらした旧石器後の革新的な変化を(1)から(4)に分けて記述し、「この中石器時代について、くどくどと描写する必要はないように思われる」とした³⁶⁾。

日本の考古学界の主流的な論者たちは、このような中石器時代否定論を受け入れてきたのであろう。そのとき、後期旧石器時代を新石器時代とよぶような事態が生ずるならば、日本には中石器時代どころか、旧石器時代もなかったことになる。また、局部磨製石器の存在と新石器時代とを結びつけるようなことをすれば、旧石器時代・縄文(縄紋)時代・弥生時代・古墳時代という、日本の通説的な時代区分も崩れてしまうのである。

このような考古学の発展と結びついた科学的認識とある種のロマン主義とが混在するかたちで、日本の旧石器時代認識の混乱は維持されてきたのではなかったか。しかし、日本の後期旧石器時代という時代認識は、ほんとうに科学的判断として正しかったのだろうか。また、日本には新石器時代といえるような時代はなかったとみるべきなのだろうか。それを反省する契機が2010年代の後半期になって形づくられたのだと思われる。

し移住ができるヨーロッパのサピエンスにとっては、一部の例外的地域を除けば、刃部磨製石斧などはさほど重要な道具とはならなかった。ヨーロッパ史においても、ラスコー洞窟のランプのような新石器や刃部磨製石斧なども出土しているから、新石器時代論を見直す必要はある。しかし、チャイルド的な新石器革命論を不当だとはいえまい。

³⁶⁾ 直接の引用はチャイルドの *Man Makes Himself* からだが、彼の主張の基本は、The Dawn of European Civilization の段階で確立されており、その後も継承された。

4 O型石器時代論再考

古い型の石器時代認識と新しい型の石器時代認識

そこでいま一度、ヨーロッパにおける学説形成史に立ち戻って、古い型の石器時代認識を再考してみることにしよう。この古い型を旧型石器時代論とよんでもよいのだが、旧型旧石器時代など書くと、「旧」が重なるので煩わしい。19世紀半ばからの旧石器時代と新石器時代の区分は、オールドな型ということで「O型石器時代」論と表記することにしよう。したがってまた、これから提示する新しい型の石器時代論については、ニュー型であるので「N型石器時代」論と称することにする。

土器製造が開始されてからの石器時代を新石器時代とよぶべきではないかという考え方がすでに提示されており、これもN型石器時代論のひとつのタイプであると考えることができる。すでに紹介した「新石器文化としての縄文文化」を捉えようとする立場は、ある種のN型石器時代論の先駆的なものと考えることができよう。

けれども、ここで提唱しようとするN型石器時代論は、土器の製造の開始はひとつの画期となりうるものであるけれども、旧石器の新石器への転換はもっと早い時代に始まったとみる石器時代論である。すなわち、サピエンスたちの出アフリカの時点を画期と考えるというかたちで、旧石器時代と新石器時代とを区別すべきではないか、というものである。

このような考え方を提示するときには、O型石器時代論にはいかなる限界があるのか、またいかなる点でN型石器時代論はその限界を乗り越えることができるのかを示さなければならない。O型石器時代論の限界をふまえたうえで、あらためてN型石器時代認識を確立する必要があるのはなぜか、を要約的に解説してみよう。

O型石器時代論とその特徴

さて、ラボックの旧石器時代と新石器時代との区分、およびチャイルドの旧

石器時代と新石器時代との区分には、かなり大きな差があるにもかかわらず、一定の共通性がある。マンモスのような大型獣たちが死滅してしまったのちの時代に新石器時代は始まるという認識は、ラボックとチャイルドの両者が共通してもっていた時代認識だったように思われる。ラボックやチャイルドの所説に代表されるO型石器時代論には、この点での共通性がみられるのである。

ラボックの著書も、いうまでもなくチャイルドの著書も、ダーウインの『種の起源』が刊行されたあとで出版された。日本でもそうだったが、ヨーロッパでは、地質学の区分として、「洪積世 (the diluvial [diluvian] epoch)」と「沖積世 (the alluvial epoch)」という二大区分が用いられてきた。洪積世と沖積世という区分は、その名称にも反映されているように、ノアの箱舟伝説で知られる大洪水以前と大洪水後という、『聖書』に記された区分がその基礎となっていた。19世紀半ばまでの考古学においても、大洪水の以前と以後という『聖書』に記された区分は、洪積世と沖積世とを区分する分水嶺となっていた³⁷⁾。

『先史時代』を出版した当時のラボックが『聖書』の大洪水の伝承からどこまで脱却しえていたかについては、いまひとつ判然としないところがある。ラボックが大洪水の伝承を信じていなかった可能性はあるが、大洪水の以前と以後という区分以外の基準が提示されてはいたわけではない。ラボックが大洪水の伝承をまだ克服できていなかったとすれば、マンモスのような死滅した動物たちと人類がともに生活していた時代の旧石器は大洪水前の石器であり、新石器は大洪水後の石器であるという区分をしていたことになる。

チャイルドの場合、『聖書』の大洪水の伝承は、もはや分水嶺とはなりえなかった。チャイルドは、第4氷河期が終わるまでの(ネアンデルタール人たちのような)旧人類が、間氷期の人口増加期も含めて、旧石器文化を形成したと考えた。彼はまた、第4氷河期以降も、現生人類(ホモ・サピエンス)は生き残り、

³⁷⁾ 地質年代の用語としても、洪積世は「更新世」、沖積世は「完新世」へと名称はすでに変更された。そこに「人新世」が加わるというかたちで、現在の時代区分は変化してきている。氷河期も、ビーバー、ドナウ、ギュンツ、ミンデル、リス、ヴェルムなどと、もっと細かく区分されるようになっている。

新石器時代の文化を形成していったと考えた。

にもかかわらず、チャイルドにおいても、大洪水の伝承が影響を与えていないとはいえない。というのは、彼もまた、新石器時代は沖積世以降の時代であるという認識をもっていたからである。大洪水によるものではないが、第4氷河期の終焉とともに、気候の変化に適応できなくなったマンモスたちは死滅してしまったと彼は考えていた。大洪水の伝承を保持した論者と異なっていたけれども、マンモスなどが死滅したあとの時代に新石器時代が始まったと考えた点で、チャイルドの認識も、ラボックが提唱した旧石器時代と新石器時代との区分認識をそのまま維持した面があった。

いま問わなければならないのは、ラボックが考えたような、新石器というべき石器の洗練と形式の多様性は、大洪水後とか、氷河期の終焉後に起こったと考えられるか否かである。この点をあらためて考えてみるならば、ネアンデルタール人たちのような旧人たちが使っていたルヴァロワ型石器とサピエンスたちが使い始めた石刃技法による石器や局部磨製石化とは、石器としてやはり基本的な区分をしておくべきではないと思われる。出アフリカ前のサピエンスたちも、石刃技法の導入などのようなかたちで、石器の製作方法を変え始めていたようである。出アフリカ後のサピエンスたちは、生産手段となる道具とその生産方法を急速に変化させてゆき、木や骨などを補助的に利用した細石刃のような進化した石器を用い、筏や舟のような交通手段を導入して広域の交易を営むような文化を地球規模で拡大していった。

そのような変化は、新しい石器時代を築くものだったみるべきであろう。けれども、そのような考え方をしない論者たちが現在の主流派となっている。また、日本の事例に即していえば、土器を製造するようになり、きわめて洗練され形の整った石鏃や石の槍先、多くの磨製石器や御子柴型石器群、細石刃などを多用するようになった縄紋時代についてすら、それを新石器時代と認めないような所説が半ば通説となっている。旧説の問題ないし限界をふまえておこう。

欧米の石器時代認識と日本列島史に関する通説的理解

あらためて、日本の考古学者たちの石器時代認識について、さらなる検討を加えておく。日本の考古学者たちは、旧石器時代と新石器時代というヨーロッパで確立された二大区分を受容し、旧石器時代という把握を継承してきた。旧石器学会が組織されていることに象徴されているように、第2次世界大戦後、旧石器時代という先史時代把握は受容され、定着した。石器の種類や製作技術などで石器時代を区分するという方法も受容された。

とはいえ、欧米の見解にも大きな差違がみられるので、その解釈や継承の仕方も含めて、日本の研究者たちの見解にも多様性がある。細部の相違はあるけれども、あえて21世紀の第1四半期における日本の代表的見解とみられるものを概括するならば、おおむね以下のように整理できよう³⁸⁾。

欧米の学説も多様だが、欧米の通説をそれ自体として整理すると、つぎのようなものと解せる。人類の発祥と最初の石器製作はアフリカでなされた。人類種としては猿人・原人・旧人・新人とその変遷を区分し、旧石器時代は前期・中期・後期に分ける。両者の対応関係としては、前期旧石器時代の文化は原人が、中期の文化はネアンデルタール人を含む旧人が、後期はホモ・サピエンスが支配的な文化を形づくった。最後に、ホモ・サピエンスのみが、新石器時代と金属器時代(青銅器時代と鉄器時代)を形成するようになり、文明社会を確立した。

しかし、中央アジアや南アジアや東アジアといったアジアの各圏域ないし地域では、こうしたヨーロッパ基準の内部区分がそのままのかたちで妥当するとはいえない。それぞれの圏域ないし地域ごとに、前期・中期・後期という旧石器時代の区分と、猿人と原人・旧人・新人という人類種の区分との対応関係は、かなりの偏差をとまなう。東アジアの旧石器時代については、前期(200~20万年前)・中期(20~4万年前)・後期(4~1万年前)といったかたちで内部区分できるが、アジア地域では原人や旧人が中期にも残り、後期にもネアンデルター

³⁸⁾ さしあたり、稲田孝司・佐藤宏之編『講座 日本の考古学第一巻 旧石器時代(上)』、青木書店、2010年、所収の諸論文、および前掲佐藤宏之『旧石器時代』などを参照。

ル人などの旧人とサピエンスは共存した。ネアンデルタール人が進出できたのは中央アジアまでで、東アジアの旧人は別人種の旧人たちであった。

このような欧米やアジアの旧石器時代認識をふまえたうえで、日本列島の人類史を整理する。日本列島では、おおむね1万5000年を前後する時代（論者や文献によって1万2000年前から1万6500年前までの差違はまだ残っている）に土器の製造が開始されて縄文（縄紋）時代が始まり、稲作をするようになった弥生時代を経て、古墳時代へと移行した。古墳時代には鉄器を使用するようになり、小国家が各地で形成され、やがて漢字を受容して文字を使うようにもなった。こうして日本列島においても都市と国家が形成され、文明社会へと移行していった。

通説的な旧石器時代から古墳時代に関する理解は、おおむねこのようなかたちで整理できる。つまり、後期旧石器時代、縄文（縄紋）時代、弥生時代、古墳時代という時代区分によって、日本列島の人類史は整理できる。

土木石骨文化とその経済的基礎の全体を視野に入れた石器時代認識

けれども、このような日本の通説的な旧石器時代認識とその後の人類史理解は、再考を迫られていよう。このような通説的理解は、すでに論じたような非論理性を前提としているからである。加えて、2010年代後半の実験考古学の成果を含む考古学的認識の深化は、旧石器時代と新石器時代という区分の再認識を迫ってもいる。サピエンスたちの出アフリカ後に、オーストラリアや日本で刃部磨製石斧のような局部磨製石器が使われるようになったほぼ5万年前以降の時代は、それ以前の旧石器時代の社会を大きく変革してゆく時代となっていたことを認識しなければならないからである。

まずふまえておかなければならないのは、最初期の人類が二足歩行を開始したとき、加工した石器を作りはじめてはいなかったということである。人類史については、二足歩行を開始した段階と、石を加工した道具つまり石器を作って使うようになった段階を、まず区別できるであろう。猿人と原人とをどこで区別するかについては、さまざまな考え方がありうる。石器を作らなかった時

代の人類は直立二足歩行にとどまる猿人、石器を作り使うようになった人類は原人と捉えることもできよう。また、火を使うようになってから以降の人類を原人として区別することもできなくはない。ここでは、石器を作るようになった人類を原人とみなし、原人の段階で火を使うようになったと解することにする。

人類史の特徴は、二足歩行を開始した初期の人類が、石器を発明し、石器を改良しながら生産廃棄過程・交通廃棄過程・本来的消費廃棄過程という経済循環を発展させてゆき、その生産廃棄様式と交通廃棄様式に支えられた消費廃棄様式を独自に発展させていった点にある。そのような経済領域の発展なしには、他の哺乳動物とは異なる、独自の人類社会の発展はありえなかった。こうして経済社会を形成し、土木石骨文化を飛躍的に発展させたことによって、人間らしい社会が形成されるようになった。その後人類は、石器の改良をさらに加えることによって経済社会を発展させ、旧人から新人へと人類種の変化がなされるなかで、本格的な地球破壊を推進するようなサピエンス社会の基礎を形づくっていった。

このように原人段階から石器時代が始まると考えると、従来の旧石器時代の三分、すなわち前期旧石器時代・中期旧石器時代・後期旧石器時代という区分を再編して、理解することができるようになる。すなわち、前期旧石器時代とみなされてきた時代を旧石器時代とみなし、中期旧石器時代を中石器時代とみなし、後期旧石器時代と従来の新石器時代を一括するかたちで新石器時代とみなすという、石器時代の新たな三分を考えることができるのである。

人類史については、土木石骨文化の発展とその基礎をなす経済領域の発展の総体を視野に入れて、把握しなおすことが求められている。そのときには、このような新しい人類史理解のほうが、従来の混乱した旧石器時代と新石器時代の認識よりも、はるかにすぐれている。いまして解説を付加しておこう。

5 N型石器時代論の提唱

N型石器時代論の先駆と新たな提唱

このような新しい型の石器時代認識をふまえるならば、さきに紹介した「新石器文化としての縄文文化」を捉えようとした立場については、一定の再評価をしてもよいように思う。この立場は、チャイルドのような、新石器革命と牧畜農耕時代の形成期を重ねる時代認識とは異なっている。すでに土器を作り、磨製石器や洗練された石器を使っているけれども、農耕や牧畜をまだ行っていない段階の時代でも、それを新石器文化とよぼうとしたことによって、それは先駆的な意義をもっているのである。

この縄紋（縄文）時代＝新石器時代説は、農耕牧畜の開始と新石器革命とを一体のものとして結びつけるチャイルド説を超えてきている。また、ラボック以来の旧石器時代と新石器時代という区分を継承してもいるが、ラボック説の単なる繰り返しでもない。チャイルドやラボックの説を継承してもいるが、いずれとも異なる新石器時代論となっているのである。この説はひとつのN型石器時代論の先駆といえるものである。

日本でもその後、土器の使用開始をもって新石器時代の開始とみようとする、崎谷満のような提唱とその具体的な記述もみられるようになった³⁹⁾。崎谷は、ヤロスラフ・クズミンの業績を先駆的なものとして紹介している。縄紋時代には、すでにシソやエゴマ、そしてダイズやアズキなどが栽培され始めていたことをふまえるならば、チャイルド的な新石器革命論を継承するかたちでも、縄紋時代を新石器時代とみなすことは十分に可能であろう。

けれども、ここでは、土器の生産が開始された時代から新石器時代が始まるとみなす先駆的なN型石器時代論とも異なる、新たな石器時代論を提起したい。

³⁹⁾ 崎谷満『DNA・考古・言語の学際研究が示す新・日本列島史：日本人集団・日本語の成立史』、勉誠出版、2019年、第2章、および『新日本人の起源：神話からDNA科学へ』、勉誠出版、2019年、第2章を参照。崎谷は、Yaroslav V. Kuzmin, Introduction: changing the paradigm. *The Review of Archaeology*. 2003.などを先駆的なものとして紹介している。

出アフリカ前のサピエンス史における準備的過程と、出アフリカ後のネアンデルタール人たちとの共生時代という中石器時代から新石器時代への移行期を経て、ほぼ5万年前ころから新石器時代が始まったとみなす。すなわち、出アフリカ後のサピエンス文化のうち、刃部磨製石器の使用がなされるようになったのはほぼ5万年前ころから本格的な新石器時代が始まったとする、新しいN型石器時代論を提起するのである。

出アフリカ後のサピエンスたちは、本格的なグローバル化を開始し、刃部磨製石斧を発明して樹木利用における画期的な変化もたらし、5万年ほど前から土木石骨文化の画期的な変革をなし遂げるようになった。サピエンスたちは、世界各地に拡散しながら一定の地域に定住するようになっていった。サピエンスたちは、樹木を切り倒し、マンモスの牙なども利用するかたちで、竪穴式住居の先駆となる住居を作って住むようになった。筏や舟を作り、さらには丸木舟を作るようになり、活動範囲を広げていった。そのような交通手段の改良を基礎として、徒歩では移動できない位置や距離にある遠隔地へと移動するようになり、海洋や河川を利用して広域の移動と交易を営むようになった。

その過程で、石刃技法の急速に広がりによる石器の改良も進み、細石刃のような新しい技術の導入と拡散も進んだ。そのような石器の改良は、サピエンスたちの狩猟や漁労の道具を改善させることと結びついていった。生産様式と交通様式の変化とともに、サピエンスたちの生活様式は大きく変化してゆくようになった。骨格牙器の拡充とその使用、アクセサリーの多様化と日常的な使用、楽器の製作と使用、絵画や彫刻などの初期的な出現と拡散、針や釣り針などの使用といった生活様式の改善が進んだ。

それらの結果として、狩猟や漁労における生産力も大きくなり、サピエンス人口の急速な増大がもたらされた。一定の地域における人口増の圧力も増してゆき、サピエンスたちは旧人たちの生活圏をはるかに超える、全地球的規模への拡散を遂げ始めた。その過程はユーラシア大陸やオーストリア大陸の域を超え、1万4000年ほど前までに南北のアメリカ大陸にまで広がった。

このようなサピエンスたちの石器文化の改革と拡大は、旧人たちのそれとは

根本的な差違をもつものであった。出アフリカ後のサピエンスによる土木石骨文化の抜本的な変革は、石器文化の改変と深く結びついていた。したがって、この出アフリカ後のサピエンス史は、猿人から旧人に至るまでのN型の旧石器時代ないし中石器時代とは根本的に区別できる。すなわち、それはN型の新石器時代への移行をもたらしたとみることができるのである。

旧石器時代の再認識

原人たちは、新たな定義にもとづく旧石器時代に、大きな飛躍をなし遂げた。小学生でも知っているように、火を使うようになると、他の動物たちと人類とは大きな差違をもつようになる。火を恐れる動物たちとは異なり、火を使うようになった原人たちは、火を使って自分たちの生命を守り、新しい知性を獲得し、人類の集団を発展させることができるようになった。

火の使用は、他の動物たちの攻撃に対する防御や反撃を可能にし、原人たちの命を守る役割を果たした。それだけではない。原人たちは、火で調理した食べ物で生活するという、食生活の革新をなし遂げた。従来の研究で縷々述べられてきたように、殺菌ないし滅菌した食事ができるようになり、火を使わなければ食べられなかった物も食べられるようになった。食生活が豊かになり、多くの栄養分を吸収できるようになったことで、知能の発達もさらにうながされた。子どもたちをいっそう安全に育てられるようにもなった。火を囲んでの談笑によって、原人たちの社会関係をさらに緊密なものにもできたであろう。

そうした原人たちの生活のなかから、さらなる発展した知能をもち、すぐれた土木石骨文化を発展させる人類が誕生した。旧人とよばれる人類がそれである。旧人たちは、原人たちが使っていた石器をムスティエ型と総称されるような、新たな型の道具として発展させた。それまでの石器による経済活動と人類の文化をさらに発展させたのである。

ハイデルベルク人に続いて現われた、おおむね30万年前から4万年ほど前までのネアンデルタール人たちは、ムスティエ型の石器を用いて、新たな文化を構築していった。この旧人たちが築いていった時代を中期旧石器時代とよんで

前ムスティエ型の時代と区別できるのならば、中石器時代とよんでもよいはずである。G・チャイルドのような中石器時代否定論を考えてみても、それは独自の新石器時代の定義に依存するものであった。原人段階と旧人段階とを区分して旧石器時代を前期旧石器時代と中期旧石器時代と分けるのも、ひとつの定義ではある。けれども、ムスティエ文化段階の石器時代を旧石器時代よりも発展した中石器時代とみなしてもよかろう。初期のサピエンスたちも、出アフリカ後の一定の時期までムスティエ文化の域をさほど超えることができなかったことをふまえるならば、旧人たちが築いた石器時代の全体を中石器時代として把握しなおすことは、十分に根拠のあることだといえよう。

そのような中石器時代の到達点をふまえて、刃部磨製石斧のような半磨製石器サピエンスたちが使い始めたことを考察してみると、それは大きな時代区分を象徴する出来事だったといえる。第1に、刃部磨製石斧の出現は、木の伐採と利用の大きな発展がなし遂げられた画期を象徴するものであった。打製石器では切り倒すのに多くの時間と労力がかかる樹木や竹、とりわけ大木を切り倒して利用することを、刃部磨製石器は可能にした。ふつうの樹木や竹のみならず、巨木の利用によって、土木石骨文化の全体を変えてゆく大きな転換がなされる可能性が生まれたといえる。

第2に、事実、木や竹が利用しやすくなることによって、大きくふたつの分野で、生活革命ともいえる変革がもたらされた。まず、一定規模の住居や大型の共有家屋などの建造が可能となった。樹木の一部を切り取って柱を作れば、一種のテントや竪穴住居のような居住空間を作ることができる。木だけではなく、マンモスの牙のようなものも、加工すれば、柱などとして利用できる。大木を利用できるようになれば、共同利用が可能な大型家屋や高さのある見張り台のようなものを作り、共同体の集落規模を大きくできる。群れ集団から半定住ないし定住したかなり大きな共同体社会の構築が可能になるのである。

刃部磨製石斧はまた、木や竹を利用した筏や舟の製作にかかる労働を大幅に軽減した。大型の丸木舟の建造もそれによって可能になった。2010年代の後半期には、この舟をめぐる大きな技術的な前進が出アフリカ後のサピエンスた

ちによって、ほぼ5万年前から3万5000年ほど前までになし遂げられた可能性がきわめて高い、ということも明らかになった。

サピエンスたちが丸木舟を含むさまざまな舟や筏を作って地球的規模で拡大してゆく時代は、ほぼ5万年前から始まるということで、考古学者たちの意見はおおむね一致するようになった。概括するならば、7万年前から5万年前までのあいだに、なんらかの舟か筏が作られたのであろう。出アフリカから一定の過渡期を含む7万年前から5万年前ほど前の時代に、サピエンスたちはグローバル化の歴史を本格的に開始し、オーストラリアまで到達できるような舟作技術を確立した。5万年前から丸木舟が製造されて用いられていたかどうかは定かではない。しかし、サピエンスたちは、5万年ほど前までに、舟を用いてオーストラリアに到達していた。

さらに、4万年から3万5000年前までには、東アジアの日本列島に到達できる水準の丸木舟が制作され、人類の海洋進出が本格的になされるようになっていたということも、ほぼ明らかになった。おおむね5万年から3万5000年までのあいだに、サピエンスたちは、海洋進出と結びついたグローバル化を本格的に開始し、アメリカ大陸や南極大陸を除くグローバル化を基本的になし遂げていたのである。

本格的な海洋進出を始め、地球的規模で拡散してゆくようになったということによって、サピエンスたちは旧石器時代や旧人たちの中石器時代の制約を乗り越えはじめたといえる。サピエンスたちの生活圏の地理的拡大という点からみると、3万5000年前までに、サピエンスたちは陸路でアジアの全域に広がっただけでなく、海路も使いながら南アジアからオーストラリアや東南アジアの島々、そして日本列島にまで到達した⁴⁰⁾。さらに、1万4000年ほど前までに、サピエンスたちは、アメリカ大陸の最南端にまで到達した。したがって、グロー

⁴⁰⁾ 出アフリカ後のサピエンスたちが海沿いに移動していったという学説については、疑念も呈されている(前掲海部陽介『日本人はどこから来たのか?』など)。しかし、5万年以上前の海岸はすでに海の底に没しているということをふまえるならば、海岸沿いにサピエンスたちが移動していった可能性を否定する必要はなかるう。舟や筏を利用して海岸沿いに移動していったという可能性は、充分にありえよう。

カル化が本格的に開始されたほぼ5万年前は、きわめて大きな革命的な変化がなし遂げられてゆく画期となったとみることができよう。

その後の石器や狩猟具の改良、果樹や豆類の育成や動物の飼育の開始、さらに米や麦など穀物生産の開始や金属器生産の開始という過程をふまえると、ほぼ5万年前の局部磨製石器の出現と本格的な海洋進出を可能にした舟の出現以降のサピエンス史は、後期ないし終末期の旧石器時代として捉えるべきではないと思える。それを中石器時代の開始期とみなすこともできなくはない。しかし、ネアンデルタール人たちのような旧人がなし遂げた大きな文化的な進展をふまえ、またその後の連続的な技術の発展過程をふまえるならば、ほぼ5万年前の本格的海洋進出時代の開始期は、刃部磨製石斧の使用開始と結びついた家屋建築の発展とあいまって、新石器時代の開始期として把握しなほしたほうがよいのではないかと思われる。

N型新石器時代の再認識

ほぼ5万年前からのサピエンス史は、後期旧石器時代と捉えるのではなく、中石器時代後の新石器時代として再把握すべきであろう。このN型の石器時代についての新たな定義によるならば、ほぼ5万年前からの変化は、1万年単位ではなく、千年単位で大きな変化がもたらされるようになっていたことが理解されるであろう。便宜的かつ形式的にだが、

- (1) ほぼ7万年前ころから5万年ほど前までの草創期、
- (2) ほぼ5万年から3万年ほど前までの前期、
- (3) ほぼ3万年前から2万年ほど前までの中期、
- (4) ほぼ2万年前から1万年前ころまでの後期、
- (5) ほぼ1万年前から5000年ほど前までの終末期、

に分けて、その過程の変化を整理しておこう。

このなかの本来的なN型新石器時代は、(2) から (4) までの時代となる。(1) は後期中石器時代から新たな新石器時代への移行期であり、(5) は新石器時代から金属器を用いる文明社会への移行期ということになる。しかし、この(1)

から(5)の過程は、基本的に連続的な変化過程とみるべきものである。

(1)は、出アフリカ後のサピエンス史の形成期であり、旧人たちの中石器時代から新石器時代への移行期でもあった。この出アフリカ後の移行期に、サピエンスたちはネアンデルタール人のような旧人たちと各地で遭遇し、彼ら彼女たちと交雑した。アフリカの南方東端部ルートから出アフリカをなし遂げたサピエンスたちが、すでに舟か筏を發明していた可能性はかなりある。第1次の出アフリカ時にはネアンデルタール人に及ばず、撤退を余技なくされたサピエンスたちも、この時期になると、旧人たちの到達水準に追いつき、少しずつ追い越すようになっていた。それは、舟なり筏なりを使って広域の移動をしつつ、テントのような簡易な居住家屋を作って半定住ないし定住的な生活を営み、移動しながら遠隔地交易を営むようにもなったことと結びついていたであろう。この段階で生産交通様式の本格的な変化が始まっていたのである。

この草創期を新石器時代への移行期として位置づけることには、当然のことながら、異論もありえよう。けれども、この時期に石器の急速な洗練化が進んでことは明らかである。先行的にはアフリカの内部が部分的に起こっていたようだが、細石刃(小石刃)の製作と使用の基礎はこの時期に形づくられた。石の使い方などを工夫し、ネアンデルタール人たちが使っていた炉の改善も図られた。ネアンデルタール人との共存の過程で、炉で焼いた料理を盛る萌芽的な石皿とかある種の匙やフォークも、この時期に作られ、使われ始めたといえる。

この時期のサピエンスたちの遺跡や遺物は、旧人たちと共存し交雑しながら、サピエンスたちがムスティエ期の石器文化を少しずつ洗練し、新しい石器文化を生みだしていった移行過程を示している。出アフリカ後のサピエンスたちは、ムスティエ期の文化からしだいに抜け出し、より洗練された石器群を生みだしていった。ラボックによる当初の新石器認識に遡って再考するならば、この時代を中石器時代から新石器時代への移行期とみなすことは、むしろ当然というべき時代認識であろう。

N型の前期新石器時代と中期新石器時代におけるサピエンス文化の発展

(2) のN型前期新石器段階ともなると、サピエンスたちの石器文化は、新石器時代としての独自性をさらに明確なものとしてゆく。飛躍的といってもよい生産交通様式の発展をなし遂げ、消費と破壊の領域を拡大していった。

サピエンスたちは、本格的なグローバル化を開始した。この段階で、出アフリカを果たしたサピエンスたちは、舟や筏を駆使して、オーストラリアに到達した。また、地中海周辺からヨーロッパ、ユーラシア大陸の北方と南方、そして中央アジアから東アジアへとその生活圏を広げてゆき、ほぼ4万年前(より正確には3万8000年ほど前)から3万5000年までのあいだに日本列島へと到達し、居住するようになった。

後期旧石器文化とされてきたこの前期新石器段階の文化は、ヨーロッパの文化区分では、原オーリニャック期(4万2000年~4万年前)、オーリニャック期(4万年~3万4000年前)、グラヴェット期(3万4000年~2万5000年前)に区分されてきた。さしあたり、ヨーロッパの区分を手掛かりとして利用しながら、解説を進めることにしよう。

すでにかんがりの言及をしたように、ヨーロッパ以外の地域でも、この前期段階でサピエンスたちは石器や木器や骨格牙器を大きく改良していった⁴¹⁾。5万年前ころ(4万7000年前までに)に、オーストリアでは刃部磨製石器が作成され使用されるようになっていた。ヨーロッパでは、原オーリニャック文化期に細石刃(小石刃)が出現した。細石刃技法は出アフリカ前のサピエンスたちが技術的基礎を確立していたという推定もなされているが、ほぼ4万年前までにこの細石刃技法は確立しており、その後世界各地に広がった。細石刃を使った槍や刃物は、金属器時代の槍や(日本刃を含む)刃剣の原型を形づくるものとなった。

居住空間や住居の形態も、この時期に大きく変化していった。穴居生活も残りにはしたが、簡易的なテントのような住居や竪穴式住居が多く形づくられるよ

⁴¹⁾ この部分の記述は、主として、小野昭「旧石器時代の動物骨・木の利用」、稲田孝司・佐藤宏之『講座日本の考古学 旧石器時代(上)』、2010年、所収、および、海部陽介監修の図録『世界遺産 ラスコウ展』、2016年、などによる。

図1 東京都・野川流域を中心とするO型旧石器時代の遺跡分布



- | | | |
|------------------|--------------|--------------------|
| 1 国分寺市 No56 | 17 殿ヶ谷戸 | 33 ICU Loc.15 |
| 2 光町 (国分寺市 No55) | 18 国分寺市 No29 | 34 ICU 構内 |
| 3 多摩蘭坂 | 19 殿ヶ谷戸北 | 35 野川 (ICU Loc.28) |
| 4 武蔵台 | 20 東京経済大学構内 | 36 坂上 |
| 5 武蔵台東 | 21 貫井 | 37 出山 |
| 6 国分寺市 No52 | 22 はけうえ | 38 東京天文台構内 |
| 7 熊ノ郷 | 23 平台坂 | 39 原 |
| 8 武蔵国分寺跡北方 | 24 西之台 | 40 羽根沢台 |
| 9 恋ヶ窪東 | 25 前原 | 41 峰上 |
| 10 西国分寺地区 | 26 中山台 | 42 分梅町 (武蔵国府関連遺跡) |
| 11 恋ヶ窪南 | 27 新橋 | 43 天神町 |
| 12 武蔵国分寺跡北方 | 28 栗山 | 44 白糸台 |
| 13 恋ヶ窪東 | 29 野川中州北 | 45 府中市 No29 |
| 14 花沢西 | 30 野川中州 | 46 鈴木 |
| 15 本町 | 31 武蔵野公園 | 47 田無南町 |
| 16 花沢東 | 32 武蔵野公園低湿地 | 48 朝日町 |

(出所)『新版府中市の歴史』、府中市教育委員会、2006年、5ページ。

うになった。図1として武蔵野台地の野川周辺の集落図で示したように、日本列島でも3万5000年前ごろから、川沿いに形成された共同体の集落集積地のような地域が形成されるようになっていた。

竪穴住居跡がどの時期からどのような規模で確認できるかは、今後の調査に依拠するところも多かろう。だが、小集落が近接するかたちで形成され、一定

の定住化がなされていたことは、多くの地域ですでに明らかになっている。穴居生活や遊動する生活様式もあったろう。しかし、日本列島でも、3万5000年ほど前から、テントないし竪穴式住居の先駆といえそうな住居による一定の定住がなされ始めていた。そのような変化は、落し穴猟が始まっていたことでも傍証を得ることができよう。

有名な例をさらにあげれば⁴²⁾、たとえば、チェコのドルニ・ベストニツェ(ヴェストニス)で発見された3万年ほど前の集落では、3軒の家屋のひとつが15メートルと9メートルからなる楕円形の大きな建物であった。住居と社会集団が大きく変化してくるのは(3)の段階になってからだが、その先駆的な住居様式は、この時期に形成され始めていた。ロシアのヤナ RHS とよばれる遺跡は、ほぼ3万3000年前の遺跡とされているが、すでにかなり大規模な集落となっていた。これらの遺跡は中期の遺跡としての性格ももつが、その形成期は前期に属する。

ヨーロッパでは、40万年ほど前に、木製の槍(ヤリ)が使われるようになり、槍先を尖らせ、火であぶって硬くするという工夫も加えられるようになっていた。木の槍先に骨角器を接着した槍も、ネアンデルタール人たちによって10万年から5万年のあいだに使われるようになっていた。この時代に、サピエンスたちの槍はさらに進化し、広い範囲で使われるようになった。5万年前以降になると、木の先端部に石器や骨角器を装着した槍が多く使われるようになり、マンモスの牙を加工した槍が作られたりもした。

すでに論じたように、日本では、3万5000年前ころから、落し穴による猟が行なわれるようになっていた。狩猟の対象がイノシシなのかシカなのかをめぐる論争もあるようだが、重要なことは落し穴による猟がある種の捕獲ルールの存在を示唆するものだという点である。落し穴による猟がなされる段階の日本では、一定の定住化がなされるようになっており、無差別な捕獲や殺戮がな

⁴²⁾ ドルニ・ベストニツェ遺跡については、前掲今西他『人類の誕生』などでも紹介され、広く知られている。ヤナ RHS 遺跡については、NHKスペシャル「人類誕生」でも取り上げられ、多数の縫い針が発見されたことなども紹介された。これらの遺跡については、ネットで検索するだけでも、最近の発掘をめぐる情報も含め、多くの知見を得ることができる。

されたわけではなかったろう。近隣の集落との争いをおこさぬよう注意をしながら、捕獲する動物を意識的に選択し管理するような、ルール化された狩猟法がすでに確立していたのだと考えられる。

オーリニャック期には、骨角牙器の加工が進み、皮をなめす搔器などにも改良が加えられた。ヨーロッパのサピエンスたちは、皮をなめすリソワールのようなネアンデルタール人たちが発明した道具の存在を知り、使うようになった。ヨーロッパでは、穴をあけた貝殻やビーズなどの装身具も作られ、使用の範囲も広がった。同時期に角製の笛なども作られるようになり、動物や女性などの彫像が出現し、グラヴェット期にかけて広がっていった。ドイツのシュターデル洞窟のライオンの頭をもつ有名な立像も、3万2000年ほど前のものだとされている。

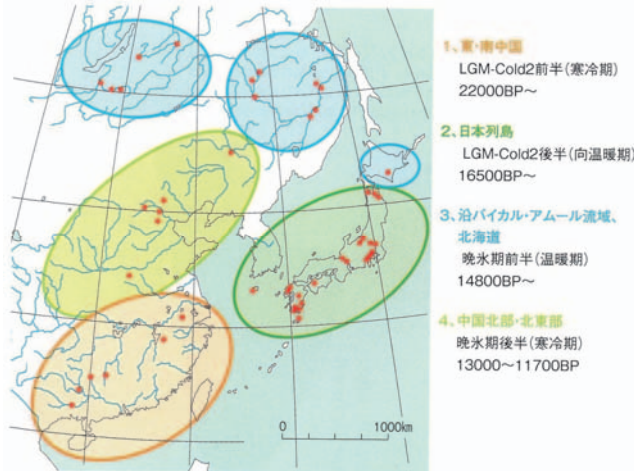
洞窟絵画も各地が作られ、クロマニヨン人たちはオーリニャック期に多くの洞窟壁画描くようにもなった。南アフリカには、7万3000年前のものとする岩絵がある。スペインの洞窟壁画には6万5000年前とされるものもあり、それはネアンデルタール人が絵画を描いたものである可能性もある。5万年前以降の洞窟絵画は、ヨーロッパでも、アジアでも発見されている。インドネシアのスラウェシ島で発見された岩絵は4万4000年前とされている。出アフリカ後のサピエンスたちによって、岩絵のような絵画は世界各地で描かれるようになった。

(3) のほぼ3万年前から2万年ほど前までのN型の中期新石器時代になると、文化的様相はさらに多彩なものとなっていった⁴³⁾。

ヨーロッパではグラヴェット文化(3万4000年～2万5000年前)が本格的に展開されるようになり、多様な槍先をもつ尖頭器が出現した。最古の土偶(焼成土製品)が作られ、女性像(いわゆるヴィーナス像)もさかんに作られるようになった。ソリュートレ文化(2万5000年～2万年前)になると、縫い針が出現する。木製や骨製の投槍器が使われるようになり、槍を遠くに飛ばすことができるようになった。弓矢の出現に匹敵する槍の進化が図られたといえる。

⁴³⁾ 以下の記述も、前掲『ラスコー展図録』、前掲小野昭「旧石器時代の動物骨・木の利用」、などによる。

図2 東・東北アジアにおける最古の土器を出土した遺跡の分布



(出所) 佐藤宏之『旧石器時代』、敬文社、2019年、114ページの図を転載。

中期の2万2000年前には、土器の製造と使用の開始時期も、始まっていたと考えられるようになった。佐藤宏之によって作成された最古の土器を出土した遺跡の分布図を図2として示したが、これがほぼ正しいものならば、世界最古の土器は、まず現在の中国の南部から揚子江下流方面にかけて始まり、日本列島とバイカル・アムール地域に伝播したといえそうである。

中欧地域ではグラヴェット文化期の土偶（焼成土製品）が出土しているから、中央アジア、そして東南アジアでの発掘が進むならば、中央アジアおよびアジア大環状文化圏の西半分にかけての圏域でまず土器の製造が始まり、アジア大環状文化圏の東半分へと広まり、その後中国の内陸部に土器の製造技術が伝播していったというような経路が判明するかもしれない⁴⁴⁾。発掘が進まなければ

⁴⁴⁾ 1930年代に、旧ソ連のアレクセイ・パブローヴィチ・オクラドニコフがウズベキスタンのテイク・タシュ洞窟を調査したときの報告書によれば、旧ソ連のG・V・パルフェノフが(カッタ・クルガン洞窟とみられている)洞窟を発掘したとき、「線刻文土器の断片、暗赤色の顔料をつかって単純な帯状彩文を施した土器片、動物を粘土で雑に造形した土偶も出土した」(西荻良宏編『中央アジアのネアンデルタール人: テジク・タシュ洞窟発掘をめぐって』、2021年、12-13ページ参照)。オクラドニコフ

ば、そのような仮説を実証できるかどうかはわからない。しかし、現状でわかっているかぎりでは、最初期の土器の製造が東方のアジア大環状文化圏で始まったことはたしかなようである。

弓矢の発明と使用も、おそらくこの時期に始まった。弓矢がどこで発明されて使用されるようになったのかはまだよくわからないが、そのもっとも有力な地域はやはり中央アジアであろう。平野部で狩りをするには槍でよいが、峻険な山地で狩りをするには弓矢のほうがよい。小さな鳥類を射止めるときにも、弓矢のほうがはるかに効率的だろう。中央アジアの考古学研究の深化は、この点でも期待される。

この中期新石器時代に、骨角牙器の改良も著しく進んだ。磨製の骨格牙器が出現したし、骨を加工した針も使用されるようになった。沖縄のサキタリ洞で2万3000年前の世界最古の釣り針とされるもの（装身具かもしれないが、縄紋時代の釣り針によく似ている）が発見されたことも、かなりの範囲で知られるようになった。マンモスの牙を加工した小像なども多く作られたし、ソリュートレ文化期の投槍器には彫刻が施されるといったことも多くみられる。ソリュートレ期のヨーロッパでは、月桂樹葉型尖頭器とよばれる、日本の神子柴系石器とよく似た石器が使われるようになった。

N型新石器時代の後期と終期

(4)の、ほぼ2万年前から1万年前ころまでのN型の後期新石器時代になると、牧畜業や農業の端緒が形成されるようになった。

この後期新石器時代に、動物の飼育化（家畜化）が始まった。分子系統学の研究ではオオカミからイヌへの分岐は1万5000年ほど前に遡るとされており、

の発掘は、ネアンデルタール人の幼児の墓を発掘するというたいへん大きな成果をあげたが、土器や土偶に関しては掘り下げた研究をしなかった。比較的新しいものとして軽視された可能性がある。しかし、もっと注意深く関連地域の土偶や土器を収集し分析したならば、それらのなかにきわめて古い（最古の可能性のある）土偶や土器が発見されるかもしれない。オクラドニコフの報告書にも書かれているように、この地域には少し掘れば出てくる広範囲の粘土層がある。今後の調査に期待したい。

イヌの飼育動物化はこのころに始まったとみられる。1万2000年ほど前の愛玩犬の埋葬事例もよく知られている。イヌは当初から愛玩動物でもあったろうが、狩猟を補助する役犬でもあり、ときには食料にもされた。柴犬のような日本犬の原型もこの時代に形成されたのであろう。イヌに始まる飼育動物化(家畜化)の過程は、その後も継続してなされてゆき、ヒツジやウマなどの家畜化へと進んでゆくことになる。

日本列島における動物の飼育化も、イヌだけにとどまらなかった。イノシシの子どもであるウリボウを舟に積んで離島に運び、そこで放し飼いにして狩猟するという方法も、飼育化の一方法といえる。いま少し厳密な調査と研究が必要なのであろうが、そのようなかたちでの飼育化ないし家畜化は、縄文時代に入る前の時代から、伊豆諸島などですでに開始されていたのではないかと考えられる。

植物の栽培も、この後期新石器時代に大きく進展していったことは、かなり明らかになってきた。食料生産のために人間が関与する行為を「栽培」、それに対応した植物の遺伝的変化を「栽培化」と広く解するならば、クルミやドングリのような堅果類、ヒョウタンのような容器にもなる植物、ダイズやアズキやエゴマのようなマメ類、そしてイモのような根菜類などの栽培化は、この後期新石器時代にはすでに始まっていたようである。

日本列島でも、圧痕分析が2000年代後半期から大きな進展をみるようになり、マメ類などの栽培の実態が明らかになってきた⁴⁵⁾。マメ科の種子の圧痕などによって、縄紋時代の草創期や早期の遺跡で確認できるようになった。圧痕分析では縄文(縄紋)時代よりも前に遡ることは難しい。けれども、農耕といわれるものの基礎がほぼ2万年前から1万年前ころまでのN型新石器時代に形づく

⁴⁵⁾ 前掲小畑『種をまく縄文人』などを参照。中山誠司の作成の「縄文時代のマメ科主の出土状況」によれば、宮崎県王子山(草創期)、滋賀県栗津湖底(早期前葉)、長野県栃原岩陰(早期前葉)、千葉県取掛西貝塚(早期前葉)、長野県山の神(早期中葉)、山梨県上暮地新屋敷(早期中葉)、山梨県御坂中丸(早期中葉)、佐賀県東名(早期中葉)などの縄文時代の草創期や前期の遺跡から、ダイズ属、アズキ亜属、ササゲ属のマメ科植物の圧痕や種子の単体が検出されている。

られていったことは、日本列島でも確認できるようになっているといえよう。

2万年以上前に遡る土器の発見がかなりなされるようになってきたことは、図2を示して前述したとおりである。日本列島でも、ほぼ1万年6000年前ころから土器が作られて使用されるようになった。日本の縄紋時代は、N型の後期新石器時代に始まったのである。したがって、土器の製造と使用においても、中国の内陸部に先駆けるかたちで、アジア大環状文化圏で始まったといえる。アジア大環状文化圏が形成され、その結びつきが進展する過程で、土器の製造と使用は広がっていったのである。

(5)の、ほぼ1万年前から5000年ほど前までのN型新石器時代の終末期になると、牧畜業や農業の端緒が形成されるようになった。けれども、哺乳動物の飼育化やマメ類や穀類の栽培化は一挙に進んだのではなかった。

哺乳類の家畜化は、さまざまな先行的な準備過程のうえで進化した。たとえば、狩猟のときにメスや未成熟の子を殺さないということは、飼育化の最初期の形態といえる。伊豆の大島にイノシシの子どものウリボウを運んでゆき、そこで放し飼いにするといったことも、すでに動物の飼育化の領域に踏み込んでいる。動物の飼育化(家畜化)というものは、一挙にではなく、徐々に進んだ。

動物たちのなかには、ある程度まで飼育しても、人間には慣れ親しまない動物もいる。自然の動物相のなかから飼育に適する種類を選びだすためにだけでも、長きにわたる狩猟や捕獲に関係する経験が必要となる。一定の選抜をしても、さまざまな方法を試し、長期の試行錯誤を重ねたうえでなければ、家畜化するのは難しい。飼育に適する動物を選抜しえたとしても、特定の性質の個体をさらに選抜して交配するという長期の実験ないし試みも必要となる。その持続的経験のうえに、ようやく、1万年前後の時期の爆発的あるいは革命的ともいえる飼育動物(家畜)の激増がみられるようになる。社会的分業のきわめて重要な一部門となる牧畜業が成立するまでには、少なくとも数千年、あるいは万年単位の歴史の準備過程を要した⁴⁶⁾。

⁴⁶⁾ 先王朝時代のエジプトでなされた実験ともいえる試みは、その点で興味深い教訓を後世に遺した。エジプトには、ヒエラコンポリスという、古王国が形成される前

農耕についても同様のことがいえる。農耕の起源については、20世紀まで、米(コメ)や麦(ムギ)などの穀物生産に焦点があてられることが多かった。ウシやヒツジなどの家畜類も貨幣としての機能を歴史的に担ったが、コメやムギなどの穀物も貨幣となった。穀物は比較的容易に蓄蔵でき、家畜類よりも輸送が容易である。穀物栽培が重要視され、N型の新石器時代の終末期に穀物栽培が農業部門のなかでも重要視されるようになったのは当然のことであった。

しかし、穀物栽培、とくに灌漑と結びついた栽培法の確立においても、やはり長期にわたる植物栽培の経験とその過程での選抜や交配の経験の蓄積が先行条件として必要であった。1万年を前後する時期における革命的とってよい穀物生産の進展も、N型新石器時代の中期から晩期にかけての経験の蓄積のうえになされたものであった。

ゴードン・チャイルドの新石器革命論

前稿でも本稿でも言及したように、G・チャイルドたちは、農耕や牧畜を彼が新石器革命とよんだ狭い意味での新石器時代と結びつけて理解した。たしかに、西アジアやエジプトでの家畜化や穀物生産の発展は、革命的な速度で進化した。しかし、チャイルドの新石器革命論には、事実認識とその農耕と牧畜に先行する諸条件の理解において、限界があった。

チャイルドは、ホモ・サピエンスの石器時代を旧石器時代と新石器時代とに

の先王朝時代の遺跡がある。特別のサイトが作られてもいるほど有名な遺跡だが、ここには地方的な王や貴族によって動物飼育の実験場が設けられていた。この施設を動物園と考える論者もあり、その解釈と矛盾するわけではないけれども、それは動物たちを家畜化するための実験場だったのだと思われる。そこではゾウやカバやワニなどの大型獣、またヒヒなどの類人猿、さまざまな鳥類などが飼育されていた。けれども、いくら権力者が短期間で家畜化を図ろうとしても、ヒヒやカバなどを家畜にすることはできなかった。やがて反乱が起り、この試みは挫折した。反乱者たちは、ヒヒやカバのような動物たちを神として崇める対象とすることによって、家畜化から守った。権力者に使役されて家畜化の試みに動員された人たちが奴隷化されてゆく過程を阻止することにも、それは繋がった。ゾウの飼育だけをみてもわかるように、動物の飼育化の過程は、長期にわたる歴史の積み重ねを前提としなければ、やはり成功しないのである。

二区分するという、ラボック以来の石器時代区分を継承し、氷河期が終わったあとに新石器時代は始まったと理解した。そのさいチャイルドは、第1に、最終氷河期の前後で大きく時代を二区分した。氷河時代以後の時代を1万5000年と見積もり、それに先だつ時代を25万年と見積もって、「人類が自然と協力して、少なくとも自然の支配に成功できたのは、人類の歴史の最後の20分の1の時期においてであった」と考えた。チャイルドの石器時代理解は、19世紀までの考古学者とは異なり、ノアの箱舟伝説を継承するものではなかった。しかし、ノアの箱舟伝説で語られていた大洪水の以前の時代を「洪積世」とよび、大洪水以後の時代を「沖積世」とよんで区別していた、19世紀までの考古学の時代認識と重なるものとなっていた。

彼は第2に、氷河期が終了するまでの人類は、「生活資料の獲得方法を大いに改良し、獲得物を区別することを知ってはいたものの、依然として獲得できるものを手に入れるだけで満足していた」と理解していた。その理解を前提として、「人間の経済を変えた第一の革命（新石器革命）」によって「人類は栽培と耕作を行ない、また食用の雑草、根茎および木を選びだして改良を始めた」と考えた。

第3に彼は、「ヨーロッパの新石器時代は、多く見積もっても、2千年しか続かなかった」と理解していた。新石器時代が2千年程度にすぎないのならば、それは20万年を超える「旧石器時代に属する時期の100分の1にも満たない年数」にすぎなくなる⁴⁷⁾。彼は、エジプトとメソポタミアで、「およそ7000年前、新石器革命によってエジプトとメソポタミアに新石器時代が始まった」と理解した。イギリスとかドイツで「新石器革命の結果がはじめて認められたのは、それより3500年後、即ち西紀前2500年のころである」とし、「デンマークの新石器時代は、西紀前1500年以前には終わっていなかった」とみている。いずれ

⁴⁷⁾ ここでは指摘しておくだけだが、チャイルドが『ヨーロッパの曙』でヨーロッパにおける人類の文明史を、(1) 旧石器時代、(2) 新石器時代と金属器使用の時代、のふたつの時代に区分したのは、彼がヨーロッパの「新石器時代」を2千年程度と見ていたことと結びついていた。2千年程度にすぎないのならば、それは20万年を超える旧石器時代の100分の1以下なのだから、新石器時代の変化を急速で革命的なものとなしたのは当然のことである。

にしても、新石器時代は何万年も続く過程とはみなせない、千年か2千年程度の比較的短いものと、彼は認識していた。

チャイルドは第4に、「ヨーロッパ、西南アジアおよび北アフリカにおいて、考古学者が調べたすべてのいちばん古い食物生産地において、基礎となる生産は家畜耕作である」と理解していた。また、穀物耕作に加えて動物が食用のために飼われるのは、「どこでも『新石器』段階の特徴である」とも解していた。

加えてチャイルドは、第5に、「新石器時代に属する人骨の数は、ヨーロッパだけで、旧石器時代の全人骨の数百倍に達している」と判断していた。つまり、せいぜい2千年ほどしかない新石器時代に、ヨーロッパの人口はきわめて急速に増加したと理解したのであった。

このような理解が正しければ、O型の新石器時代の変化を革命的と考えるのは、当然である。氷河期が終わるまでの20万年を少し超える時代は、ほぼ1万年を単位として、ゆっくりと変化していった。これに対して、2千年ほどのO型新石器時代には、百年単位で農耕や牧畜が発展してゆき、旧石器時代に比して飛躍的に人口が増加した。チャイルドのこのようなヨーロッパ史の理解に立脚し、それに限定するならば、「新石器革命」という理解の仕方は一定の根拠のあるものだったといつてよい。

チャイルドの新石器時代認識の限界

しかし、チャイルドの新石器時代の理解については、いくつか補足しておかなければならないことがある。彼の新石器時代認識には、かなり曖昧な、あるいは不十分な認識が付随していたからである。今日の見地からみて、訂正ないし補足すべき論点がいくつも存在する。ここでは以下の三点に絞って論じておこう。

その第1は、磨製石斧についての理解である。チャイルドは、磨製石斧を基本的には旧説型の新石器時代に出現したと考えていたようである。「旧石器時代後期には斧に似た利器はまだ知られていなかったらしい」と、彼は考えていた。彼は、「新石器時代の道具の特質は、その先端が磨かれて、鋭くなっていること」

だとし、「この新しい技術は、ほかの石のうで穀物を挽くために使った砥石を観察した結果から暗示されたのかもしれない」という推定をしたりした。このような記述からみると、チャイルドは、刃先という局部のみが磨かれている刃部磨製石を新石器時代の時代の道具だと考えてもいたといつてよかろう。

ところが彼は、「この利器が本当に新しい経済の結果であることは疑わしい」とも書いていた。「斧に似た利器は、なんら農耕の印もなかったずっと以前のバルチック沿岸でも発見されている」とか、「磨製石斧と片刃石斧は、まだ食用動物の飼養も作物の栽培も行なっていない北ヨーロッパの森林地帯の若干の住民によって、たしかに使われた」と書いていた。「オーストラリア人まで含めた、多くの代表的な食物採集者も磨製石斧を使った」ことを認めてもいた。

これらの記述を併せて考えてみると、結果的に彼は、刃部磨製石斧が新石器時代の石器なのか、旧石器時代の石器なのかについては、一義的な見解をもちえなかったようにみえる。あえて推測すれば、刃部磨製石器については、基本的には新石器時代の石器だが、旧石器時代から特定の地域で継承されてもきたものだと考えていたようである。

けれども、出アフリカ後のサピエンスたちは、刃部磨製石斧のような局部磨製石器を使うようになっていた。刃部磨製石器の出現は、O型の新石器時代ではなく、O型の旧石器時代に出現し、広範に利用されるようになっていた。

第2に、土器の出現についても、チャイルドは二面的な解説をした。彼は一方で、「土器は、食料生産経済の出現以前に発明されたかもしれない」ことを認めていた。しかし他方で、「穀物食料の準備と貯蔵が、熱に耐えると同時に、液体をも入れる容器の製作を促したことは想像できる」とし、「新石器時代の共同体の一般的特徴は壺の製作であったと思われる」などとも、書いていた。チャイルドは、土器の製作の開始が旧石器時代のことであったとしても、それが一般化するのには新石器時代だとみていたようである。土器の製作がいつ始まったのかについては、明確にできなかったようにみえる。

すでに論じたように、土器は1万5000年をはるかに遡る時代に出現していた。土器は、完新世（沖積世）の時代以後に発明されたものではなかった。土器は

おそらく、2万年以上前の時代にはすでに出現し、使われるようになっていた。土器もまた、O型の新石器時代ではなく、N型の新石器時代に出現し、O型の後期旧石器時代からO型の新石器時代にかけて、つまりN型の新石器時代に改良されていったものなのである。

第3に、編み物と織物について、また縄や紐についても、少々ふれておくことにしよう。チャイルドは、「エジプトや西南アジアにおける最初の新石器時代の村の遺跡のなかには、最初の織物の痕跡がある」とみていた。彼は、亜麻や木綿のような栽培植物、また羊毛など畜産の素材を前提として織物を考えていたようである。織物を織るためには紡績装置が必要であり、織機のような「ひじょうに精巧な機械」の発明は「人智の偉大な勝利」だが、「旧世界では本物の織機の存在は新石器時代に遡る」といった指摘もしていた。このような記述からみて、織物はO型の新石器時代の産物とみていたようである。

しかし、いま少し織物ができる前提条件を考えてみるならば、織物が作られるまでには、縄や紐がその前に作成され、使われていなければならない。そのようないわば縄紐文化といえるような文化は、遅くともネアンデルタール人たちの段階ではすでに形成されていたのだと思われる。最初はつる草や皮の一部を裂いたものとか動物の長い毛を使ったようなものだったかもしれないが、なんらかの縄ないし紐がなければ、動物の毛皮は衣服として利用できない。縄や紐で「縛る」ことができなければ、毛皮はすぐにずり落ちて脱げてしまうからである。ペンダントや首飾りも、紐がなければ作れないし、使えない。出土遺物ではまだ確認できないかもしれないが、着柄技術の存在を考えると、縄なり紐なりで縛るといふことも、求められたであろう。端緒的な縄紐文化は、旧人の段階ですでに確立されていたのではないかと思われる。

草を編んだ草束舟や筏を作るとき、草束や木や竹を縄や紐で結びつけなければ舟や筏はできない。それらの舟や筏をどこかに繋ぎ止めておくためにも、縄や紐は不可欠である。舟や筏で出エジプトを果たすためには、縄や紐の存在はすでに先行条件となっていた。サピエンスたちは、4万年から3万年のあいだに、穴をあけた貝や牙をつないで首飾りのようなアクセサリーを広範に作るように

なっていた。

2万年以上前に縫い針が発明され、釣り針が用いられていたということも、縫い合わせるときの糸や釣り糸に類するものがすでに存在し使われていたことを示している。針と糸があったということは、縫物文化があったことを意味する。草や樹皮を利用して編み物の籠などを作ることも、土器の作成に先だっとなされていたであろう。縄の紋様を付した土器が1万年をかなり遡る時代からシベリアや日本列島で使われていたということも、繊維をより合わせて作った縄紐文化などがきわめて古い時代からあったことを想起させる。

本格的な農耕や牧畜が開始されるはるか前から、縄紐文化や編み物文化といえる文化はサピエンス文化のなかに組み込まれていた。いつからということは、まだ充分には確定できないかもしれない。しかし、舟や筏を利用して出アフリカ後のサピエンスたちは、すでに編んだ縄や紐に類するものを使っていた。3万年以上前から糸状のものを作り、編んだ縄や紐を用いていたのである。樹皮や竹などを使って編み籠のようなものを作ったりしていたことも、十分に推測できる。

そのような先行技術の蓄積のうえに織物の技術は形成された。すなわち、織物もまた、縄紐文化や糸を使った縫物文化の永きにわたる蓄積のうえに実現された。織物もO型の新石器時代になって突如出現したようなものではなかった。織物も、出アフリカ後のサピエンスたちによる何万年かの長期の準備過程に立脚するかたちでのみ、出現しえたのである。

チャイルドの所説は、このような曖昧な記述や事実の不十分な認識があった。出アフリカ後のサピエンスたちの永きにわたる準備的な変革過程を視野に入れておらず、出アフリカ後の人類が営々と続けてきた準備過程を過少評価していたといわざるをえないであろう。栽培する作物の選抜と交配の過程、飼育しやすい動物を選抜し交配して飼いならす過程は、最終氷期が終わったときから始まったのではない。筏や舟を作り、縄紐文化や糸利用の文化、そして編み物の文化なども、出アフリカ後のサピエンスたちが、さまざまな地域で、旧人たちの文化を吸収しつつ少しずつ改良し、推し進めてきたものである。

以上の検討をふまえるならば、ノアの箱舟伝承の名残りをもつラボック説も、チャイルド流の新石器革命論も、それぞれの意義をふまえたうえで乗り越えることができよう。旧石器時代と新石器時代という二大区分は、今日においても有効である。しかし、ラボック説やチャイルド説に制約された古いO型の石器時代論は、時代の制約を免れていなかった。刃部磨製石器の発掘のような地道な考古学研究成果とスギメの航海のような実験考古学の成果をふまえて、これまでの石器時代学説を検討してみるならば、やはり、本稿で提起したような、新しいN型の石器時代認識の確立が求められているのではなかろうか。

まとめに代えて

きわめて長大な回り道をするようになった。あらためて、アジア大環状文化圏は、いつ、どのように形成されたか、という問題に立ち返ることにしよう。これはたいへん興味深く、かつ奥の深い問題である。

どのようにという問題は、歴史の時間的変遷のなかで探らなければならない。そのためには、悠久の歴史、とくにユーラシア大陸およびオーストラリア大陸をめぐる何万年もの歴史をたどらなければならない。それはここでの考察をはるかに超える、別の問題群に取り組むことを要請する。

けれども、これまでの回り道をふまえてアジア大環状文化圏の形成史を振り返るならば、いつ始まったかという、その形成史の端緒ないし起点については、つぎのように結論することができよう。すなわち、その起点は、出アフリカを果たしたサピエンスたちが中央アジアに到達し、さらにシベリアやヒマラヤ山脈の裾野を通過して、日本列島に到達した時点にある、ということがそれである。すなわち、アジア大環状文化圏の起点は、再定義をしたN型新石器時代における、ほぼ5万年から3万5000年ほど前に形成された、といえるのである。

この認識は、この大環状文化圏の全体を視野に入れた研究の必要性を提起する。そのさい、中央アジア史研究のさらなる探求は、きわめて重要な意義をもつであろう。旧ソ連圏に属していた中央アジアの国々での発掘とその成果の分

析は、長いあいだソ連の考古学者たちによってほぼ独占されてきた。けれども、その成果はまだ初期的な段階にとどまっていよう。

出アフリカ後のサピエンスたちにとって、中央アジアは新しい飛躍をなし遂げる中心地のひとつだったように思われる。すでに示唆をしておいたように、土器を最初に作り始めたのはこの地であった可能性が高い。たとえ最初でなくとも、土偶を作り始めた中欧ないし東欧との交通関係からみて、中央アジアの圏域はなんらかのかたちで粘土の利用における重要な意義をもったように思える。この地域が、金属文化の構築や馬の飼育における画期的な発展を遂げるときの中心地であったことは、すでにわかっている。また、仏教のような思想の伝播や変革において、中央アジアの道が決定的な重要性をもつものであったことも、すでにわかっている。中央アジアなどをも視野に入れた、このアジア大環状文化圏全体の考古学的な、そして経済社会学的な基礎研究の深化が求められていよう。その分野では、日本の多くの研究者たちは有益な貢献ができるであろう。まだほとんど手つかずの分野に近いかもしれないが、研究者たちによるさらなる研究の広がり と 深化を期待したい。